第百十二回 京都大学書道部 大椿展

平成二十五年十一月二十一日・二十二日

十時～十七時（二十一日は受付十六時まで）

於 みやこめっせ（京都市勧業館）

地下一階特別展示場

～巻頭に寄せて～

本日はお忙しい中、京都大学書道部第 112 回冬樟展にお越しいただき、誠にありがとうございます。

今回の書展は、例年とは異なり、みやこめっせでの開催となりました。それに伴い、京都大学書道部の個性が表現できるような書展にしたいという思いを込めて、書展の名前には京都大学のシンボルでもある「樟（くすのき）」という文字が入っています。

部員数 120 名、出品数は 100 作品を超え、過去最大規模となった書道部は今「進化」し続けています。私たちにとって今回の書展では初めての挑戦も多く、正直に言うと不安もたくさんありました。しかし書道を通して出会った仲間と共に、書道に対して真摯に向き合い「邁進」、そして更なる「躍進」を目指して今日まで取り組んできました。

文字は心を映す鏡であるということはよく言われますが、今日この会場に展示されている一つ一つの作品から部員それぞれの書に対する真っ直ぐな気持ちや書くことを心から楽しむ様子を感じ取っていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回こうして書展を開催できるのも、たくさんの方々のお力添えがあったおかげです。日頃からご指導いただいている顧問の阿辻哲次先生や技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめ、関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成 25 年 12 月

京都大学書道部部長　　河原理恵

「手書き字形と印刷字形」

阿辻　哲次（京都大学大学院　人間・環境研究科　教授）

アメリカのある大学で日本語を教えている知人から、電子メールで質問が寄せられた。「《天》という漢字は日本の辞書では上の線が長く、二番目の線が短く印刷されているが、中国系の学生が書く《天》は、二番目の線の方が長くなっている。それでも正解にしていいだろうか？」という内容だった。

たしかに中国で出版されている辞書では、「天」の字形がそうなっている。よくまぁそんな微妙なちがいに気づいたものだ、と感心したものだった。

たとえば「末」と「未」ではどちらの線が長いかによって意味がちがってくる。「申」と「甲」では縦線が突き抜けるか抜けないかで字種がことなる。このようなグループでは筆画が厳密に区別されなければならないことはいうまでもない。しかし「天」では、横線のどちらを長く書こうが、「テン」と読み「そら」を意味する漢字であることはまちがいなので、もちろんそれは正解である、と私は返答した。

日本ではとくに国語教育関係者の中に、辞書に印刷されている漢字の形が唯一の規範であって、その通りに書かないと正解としないという人がいるが、それはとんでもない暴言である。いまの日本で印刷に使われている明朝体は、かつて中国で主流であった木板印刷において、見栄えをより美しくするためにデザインされた結果であって、規範的な字形を示すものでは決してない。そもそも印刷される通りに書くことなど、日本でも中国でもありえないことだった。手書きの文字にはいつの時代でも書き手の豊かな感性が字形に反映されていた。

液晶画面に表示される無機質な字形が氾濫する現代に、手書き文字の文化が見直されるのは実は当然の帰結なのである。

「創作へ」

技術顧問　寺本蒼玄

今まで四回に分けて「文房四宝」を説明してきましたが、今回から、それらを学んだ上の作品づくりを進めていきます。

まず作品を創りあげる場合に、どのような感じの作品にするかをイメージしてみて下さい。次に紙のサイズを決め、書く言葉や詩文、そしてどのような書体、書風にするかを考えたなら、用紙、用具（筆、墨）を整えます。それから文字をデッサンして、大体の仕上がる形を創っていきます。初めての人は、自分の好きな古典を見つけて、まず臨書をしてみると良いでしょう。本来は、その古典の良さが理解できるまで徹底的に臨書して、五年十年とかかるのですが、学生の間となると間に合いません。そこで書く文字をどのようなイメージにするかを決めたなら、その雰囲気に合う古典の文字を探して書いてみることです。その特に紙、墨、筆の三つがうまくかみ合うように整えていくことが大切です。

ただ、クラブ内にある用具、用材だけで仕上がるよう、自分でそれぞれを吟味して探して使うことが大事だと思います。

先輩や先生に聞いて、専門店に出向いて、自分で確かめてから購入して下さい。時間をかけて、題材を決め、デッサンをして、一気に仕上げることが創作への近道です。

いろんな書展を見たり、古典を見て感動を覚える書作品を参考にして自分の作品へ生かしていって下さい。

臨書と創作

～臨書～

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは古典の字形や用筆そっくりに迫ろうとするもので「形臨」といいます。形をまねることは、その古典にせまる最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われて、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

また古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップになります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品を学ぶことを基盤としています。書道における基本とも呼べるものが臨書というわけです。

～創作～

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句、詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られるさまざまな表現方法を用いることで作品に味わいや、深みを出すことができるようになります。

～法帖～

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本にとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の冬樟展では、各臨書作品の右横に、臨書した箇所のみですが、法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしていますので、鑑賞の参考にして頂ければ幸いです。

書体について



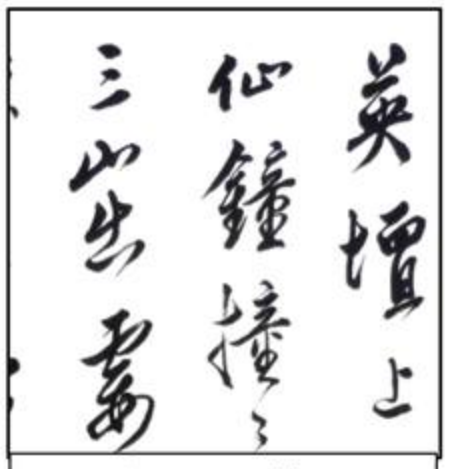
『篆書』
漢字の最も古い形で現在使われている漢字のもとになった字形です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。線の両端が丸くなっているものが多いです。



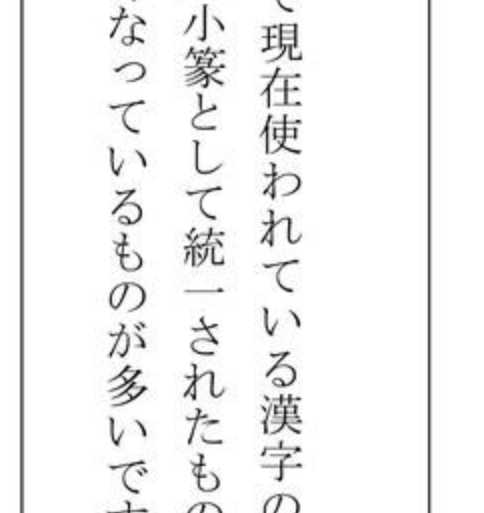
『隷書』
役人が、複雑な字形だった篆書を早書きしたものから生まれた字形で、横に長く、のびのびとした印象があります。時代が進むにつれ、線の終わりが独特な「波磔」と呼ばれる線がみられるようになります。



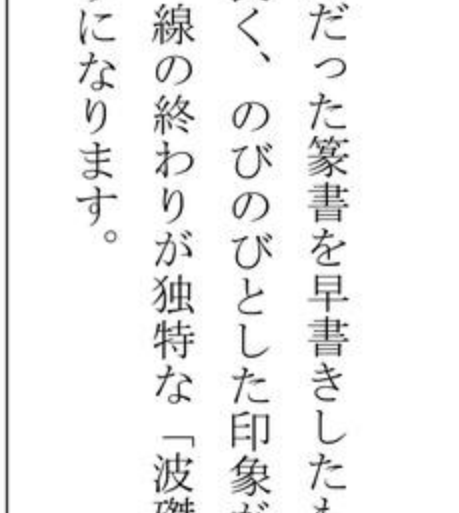
『楷書』
隷書からさらに記号化され、バランスのとれた字体です。整った字形から現在の漢字の基本とされています。



『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や筆画の流れが最も重視される書体といえます。



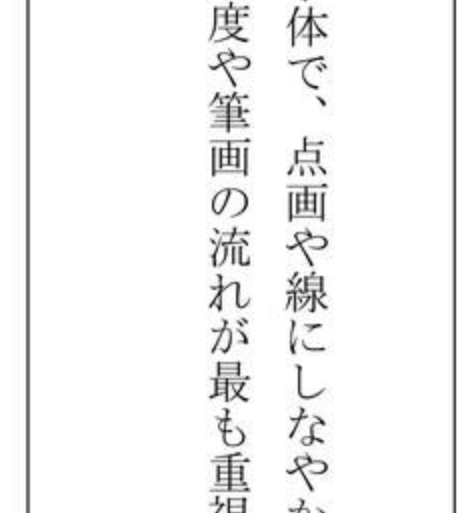
『草書』
隷書を速筆することから発展した字体です。
線の省略や、筆順の変化があり、楷書よりはるかに自由度の高い作品が多くみられます。文字の流れや、文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独自の表音文字です。漢字を字源とし、草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものをいいます。漢字仮名交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



『前衛』
きれいな字を書くことにこだわらず墨の跡や空間をうまく使って書かれている書体です。視覚表面芸術として純粋に造形・線・墨色。余白などの美しさを主張しているのが魅力的です。

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　『中庸』より「学を好むは知に近し」p9

修士二回

高垣茜　臨書　張瑞図「杜甫飲中八仙歌巻」「張瑞図詩巻」p26
福田宗弘　臨書　王羲之「蘭亭叙」p34

修士一回

中川和也　創作　「雨が降らなくたって」p29
永溝聡士　臨書　文徴明「南樓傷春詩」p29

四回生

東佳央里　創作　「我が人生訓」p10
井上莉穂　臨書　勝海舟「鑒誠語」p10
植島寛之　臨書　王鐸「家中南澗作」p11
太田悠子　創作　「芯 - ゆるがないもの - 」p40
大庭諒介　臨書　藤原行成「針切」p15
小野愛美　創作　「巡礼の地」p16
佐藤綾美　臨書　董其昌「日月詩巻」p16
杉本綾香　臨書　米芾「張季明帖」p22
鈴木新人　創作　「くまさん」p23
鈴木遼　創作　「採蓮曲」p25
　　創作　「不思議」p24
　　創作　篆書「百折不撓」p41

三回生

上田美幸　臨書　褚遂良「雁塔聖教序」p12
大泉陽輔　臨書　楊峴「隷書文語四屏」p15
川上澄香　創作　「芳馨を折りて思う所に遺る」（楚辞 九歌 第2 山鬼より）p40
菊池悠里　臨書　歐陽詢「九成宮醴泉銘」p18
小松聡子　臨書　「隷書崔子玉座右銘」p21
柴田翔　創作　「環 ―― めぐる ――」p21
鈴木貴也　臨書　徽宗「蔡行勅巻」p23
多門千早　臨書　黄庭堅「王史二墓誌稿」p27
　　創作　「笑ったもん勝ち」p41
寺田実穂子　臨書　「金剛院切」「三輪切」「東大寺切」p27
寺西幸　創作　「伊吹山」p28
橋詰奈央　創作　「ひいらぎつばき」p41
檜山葵　創作　「さ夜更けて‥」p31
藤井結稀　臨書　伝紀貫之「高野切第三種」p31
山本大翔　創作　「風細飛花相逐、林深啼鳥時移」p42
　　創作　「冬季」p36
吉田梨沙　創作　「群青日和」p43
渡辺健介　創作　「月と星」p39
　　創作　「五言対聯」p38

二回生

武井友里恵　臨書　徽宗「草書千字文」p27
仁位元信　創作　「勧酒」p30
村田真名美　臨書　黄庭堅「松風閣」p35
山口萌　創作　「牡丹」p35
脇本啓太　臨書　伝小大君「香紙切」p43

稲葉由花利　臨書　「高野切第二種」p12
王隽斉　臨書　王羲之「喪乱帖」p14
大石龍太　臨書　「蘇慈墓誌銘」p14
岡本悠　臨書　伝紀貫之「高野切第三種」p15
片野裕太　臨書　王獻之「地黄湯帖」p17
河合翼　臨書　董其昌「菩薩蔵経後序」p17
河原理恵　創作　「黙如雷」p18
　臨書　「魏霊蔵薛法紹造像記」p20
北堀雄大　創作　「進」p18
　臨書　歐陽詢「九成宮醴泉銘」p18
小島健史　臨書　褚遂良「雁塔聖教序」p19
柴田尚紀　創作　「溶岩」「継色紙」p41
石博昭　臨書　小野道風「継色紙」p41
辰巳鴻介　創作　「従軍行雁塔聖教序」p19
中谷百花　創作　「進」p19
　臨書　歐陽詢「九成宮醴泉銘」p18
中野綾香　臨書　褚遂良「雁塔聖教序」p19
東村智佳　創作　「溶岩」「継色紙」p41
藤田雄也　臨書　小野道風「継色紙」p41
松澤祐実　創作　「従軍行雁塔聖教序」p19
宮下拓也　臨書　褚遂良「雁塔聖教序」p19
家倉凌　臨書　董其昌「寄金陵天目僧詩」p25

一回生

新井一矢　創作　「百寿図」p10
　臨書　「曹全碑」p10
荒巻拓哉　臨書　王羲之「七月帖」p11
上西隆太　臨書　「雁塔聖教序」p13
牛山泰喜　臨書　王羲之「喪乱帖」p14
　臨書　「蘇慈墓誌銘」p14
上井晴仁　臨書　伝紀貫之「高野切第三種」p15
闇妹恒　臨書　王獻之「地黄湯帖」p17
角谷遊野　創作　「玉樓春」p13
　臨書　「菩薩蔵経後序」p17
加藤大智　臨書　褚遂良「楷書千字文」p16
釜阪紘平　臨書　歐陽詢「九成宮醴泉銘」p17
藏岡凌平　創作　「ビロードベニヒダタケ」p17
篠原理那　臨書　鄭道昭「鄭羲下碑」p19
白谷暢浩　臨書　王鐸「寄金陵天目僧詩」p25
神保里帆　臨書　藤原行成「針切」p22
宗哲仁　臨書　光明皇后「楽毅論」p23
徳川鈴奈　臨書　王羲之「蘭亭叙」p26
疋田研一郎　臨書　紀貫之「寸松庵色紙」p42
古川智大　臨書　紀貫之「高野切第一種」p33
寶官紗紀　臨書　王羲之「蘭亭叙」p33
松下有菜　臨書　鄧石如「篆書白氏草堂記六屏」p37
山崎絢香　臨書　傅山「行書詩巻」p32
山下燎亮　臨書　文徵明「行書詩巻」p33
山脇謙　臨書　王鐸「臨王獻之喪乱帖」p35
吉村友希　倣書　莫是龍「山居雑賦巻」p36
　臨書　「蘇慈墓誌銘」p36

合作

水谷慈・山口萌・鈴木新人・平野泰隆　「枕草子を綴る〜華麗なる書き手たち〜」p44
大庭諒介・奥山優・鈴木新人「落款と神話体系」p44
小島健史・稲葉由花利・北堀雄大・石博昭

臨書　鄧石如「正草篆隷墨寶册」p45
永溝聡士・小松聡子　創作「篆刻合作」p45
木谷亮太・永溝聡士
創作「オリジナルハリケーン～kid, I like quartet より」p45
四回生合作　「四回生×人生ゲーム」p46
全体合作　「サンタさんからの贈り物」p46
お客様参加企画　～文字さがし～p46

作品紹介

賛助作品



『学を好むは知に近し』（中庸）
（学ぶことを好む人は、知に近づく）
「好學近乎知」
作品のインパクトが伝わるように仕上げました。

一．東佳央里　四回生

臨書　草書　勝海舟『鑒誡語』　半切

「澹然無欲。空洞無物。斷然剛果。侃然勇往。」

はじめて日本人の書作品の臨書に挑戦しました。鑒誡の語という題からして海舟が人生の指針にしていた言葉でしょうか。

この書を見たときに私が感じた、幕末から明治初期の動乱のなか、海外にも目を向けつつ、新しい時代をつくった一人である海舟の、聡明でありながら勇敢で情熱的に生きた様を表現できていれば幸いです。



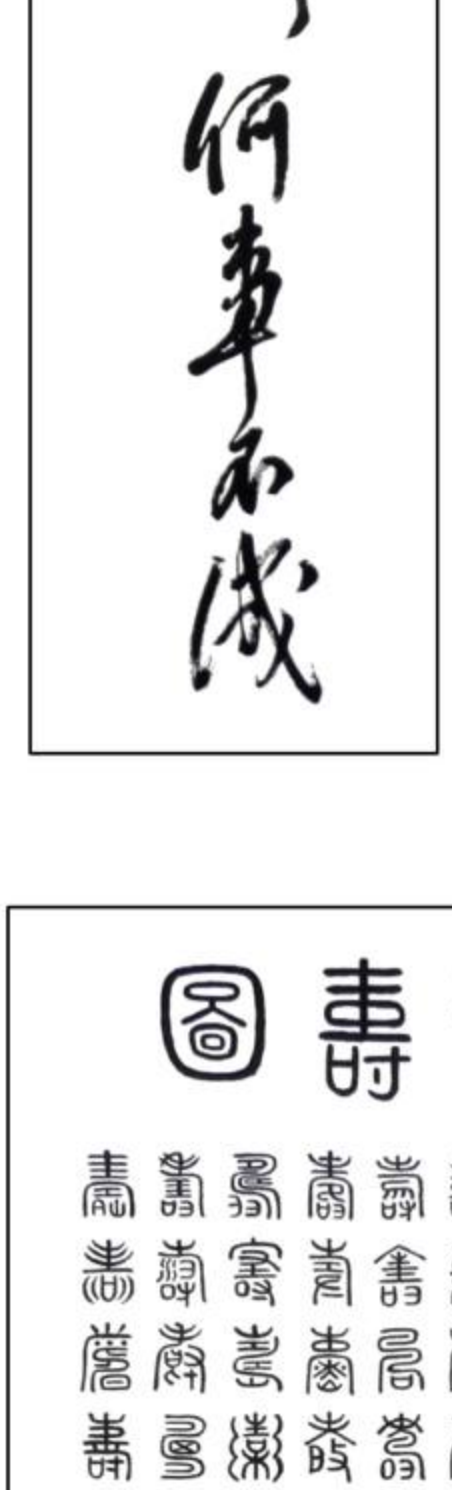
二．東佳央里　四回生

創作　草書　『我が人生訓』　半切

『精神一到　何事不成』

はじめての漢字創作作品です。四年間ずっと臨書してきた王鐸から字を集めました。

「精神一到　何事か成らざらん」と読みます。中学生の時にこの言葉の英語版を授業で教わったときからずっと私の座右の銘です。不安なときや落ち込んだとき、何かにチャレンジしようとするときにいつもこの言葉が不思議な力をくれます。



三．新井一矢　一回生

臨書　隷書　『曹全碑』　半切

「清擬夷斉直慕史魚歴郡／右職上計掾史仍辟」

今まで挑戦したことのなかった隷書の臨書に初めて挑戦しました。最初は手探り状態でしたが、字形や雰囲気を掴めるよう努力しました。曹全碑の流麗で典雅な雰囲気を感じて頂ければ幸いです。



四．新井一矢　一回生

創作　篆書　『百寿図』　聯落

「（寿×100コ）」

『百寿図』は、中国伝統の吉祥文字図の一つで、長寿の願いや吉報の連続の願いが込められています。異なる形の百個、全てが“寿”の文字。その面白さと縁起の良さに惹かれ創作しました…が、字形や線質、字間のバランス全てにかなり気を使い、自分はむしろ寿命が縮んだような…。皆様の長寿を切に願っております。



五・東佳央里　四回生

臨書　草書　王鐸　『家中南澗作』　二尺×八尺

「家硎誰登眺。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸毋寇(郡)郡(寇)仍緊。三年人未歸。石壇偃臥否。處々野棠飛。家中南澗作。」

四年間ずっと王鐸を書き続けています。今回は王鐸らしさがつまった作品の臨書に挑戦しました。字の大小や行の揺れの大胆さがありながらも、全体がきちんと作品としてまとまっている。さすが王鐸です。きっと私の最後の王鐸臨書作品になると思うので、王鐸らしさを出すように努めながら、思いっきり楽しんで書きました。

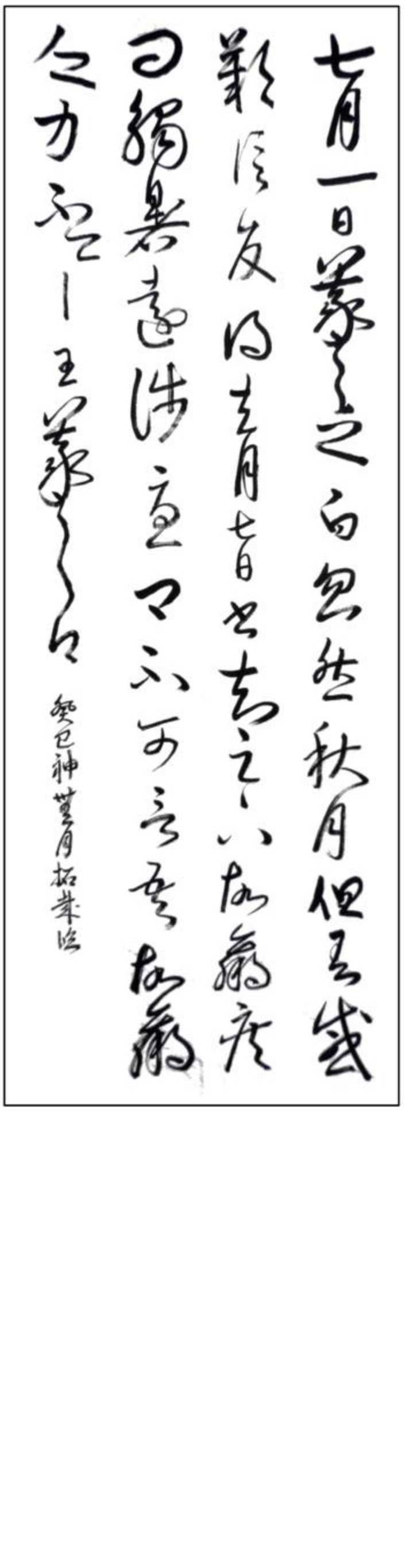


六・荒巻拓哉　一回生

臨書　草書　王羲之　『七月帖』　二尺×六尺

「七月一日羲之白忽然秋月但有感歎信反得去月七日書知足下故羸疾問觸暑遠渉憂卿不可言吾故羸乏力不具王羲之白」

書聖・王羲之の書の臨書です。行書か草書が書きたいと思っていたところにこれを見て、七月一日が自分の誕生日ということで書くことに決めました。

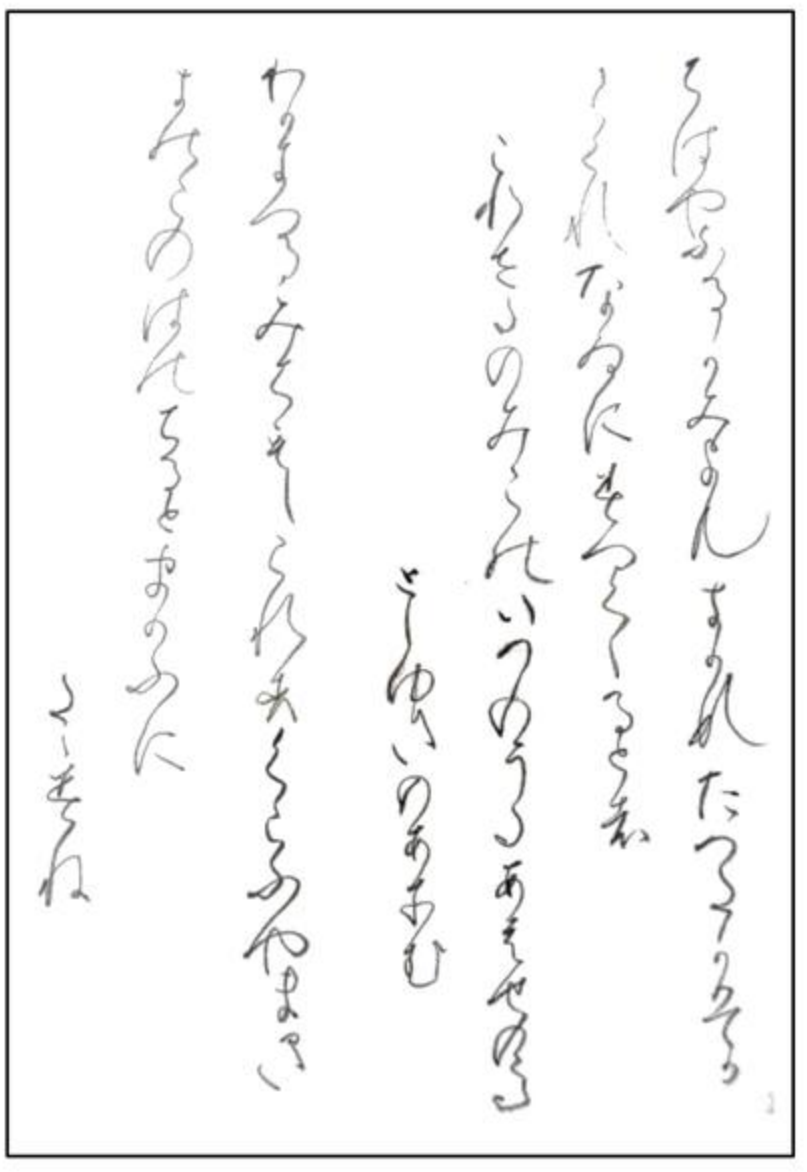


七．稲葉由花利　二回生

臨書　かな　高野切第二種　全懐紙

「ちはやぶる　かみよもきかず　たつたがは　からくれなゐに　みづくゝるとは　これさだのみこのいへのうたあわせのうた　としゆきのあそむ…」

初めて仮名に挑戦しました。墨のすり方、筆の持ち方、運筆の仕方…、分からないことだらけでしたが、いろんな人に教えてもらってなんとか形にできました。和歌はすべて秋の歌です。書展のころには紅葉は散ってしまっているでしょうか…。綺麗な京都の紅葉を思い出しながら見ていただけると幸いです。

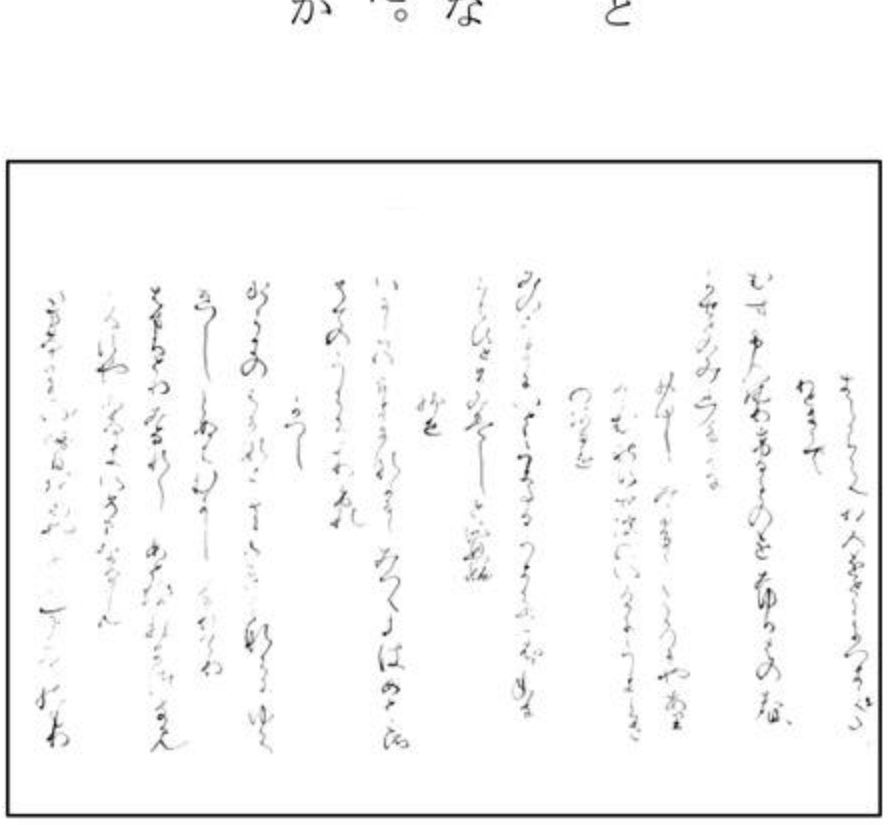


八．井上莉穂　四回生

臨書　かな　伝小野道風　『小島切』全紙

「木枯らしの風のつかひは近けれど人の忘るゝものにぞありける」他

高校時代から慣れ親しんだ作品である『小島切』の臨書に改めて挑戦しました。『小島切』を臨書すると、高校時代の思い出がよみがえって初心にかえったように感じます。技術面だけでなく精神的にも少しだけでも成長していればいいなという思いで書きました。



九．上田美幸　三回生

臨書　楷書　褚遂良　『雁塔聖教序』　半切

「大唐皇帝述三蔵聖教序記夫顕揚正教智無以廣…。」

「聖教序」と「序記」の「序記」のはじめのほうを臨書しました。本来はその二石は並んでおり、「序記」は左から右に文章が進んでいくのですが、単体で作品にするにあたっては普通に右から左へと臨書しました。半切三行の構成は以前からやってみたかったので、後悔や反省の気持ちはありますが、楽しんで書けたので、良しとしたいです…。

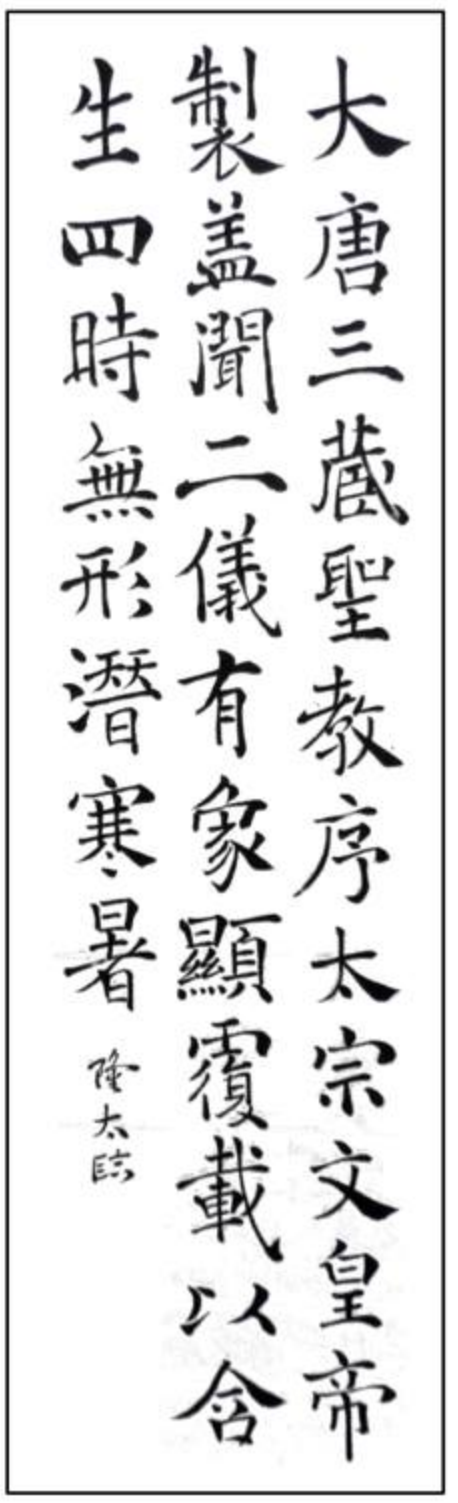


十．上西隆太　一回生

臨書　楷書　褚遂良　『雁塔聖教序』　半切

「大唐三藏聖教序太宗文皇帝製盖聞二儀有象顯覆載以含生四時無形潛寒暑」

雁塔聖教序の冒頭を臨書しました。これが初めての臨書作品です。強弱のある多彩な線や，独特の字形を表現するのに苦労しました。まだまだ未熟な点が多々あると思いますが、少しでも雁塔らしさが出ていれば幸いです。



十一．牛山泰喜　一回生

臨書　隷書　『乙瑛碑』　半切

「臣愚以爲如瑛言孔子大聖則象乾灬爲漢制作先世所尊祠用衆牲長吏備爵今欲加寵子孫敬恭朔祠傳于罔極」

隷書について基礎を学ぼうと思い、最古の隷書古典の中から乙瑛碑を選びました。字ごとに様々な線質が混ざっていて面白いところが表現できたらいいなと思います。また、作品としての配置のバランスにも気を配りました。



十二．上井晴仁　一回生

臨書　行書　米芾　『蜀素帖』　半切

「青松勁挺姿凌霄恥屈盤種々出枝葉」

適当に書いている感じがして、軸もぶれていてカッコイイ。このようなところにひかれてこの作品を選びました。強弱のある多小を意識して書きましたが、いろいろと未熟です。これから五年間？、書道でも勉学でも精進します。この「蜀素帖」のように「最後にはまとまる」ような大学生活にしたいものです。

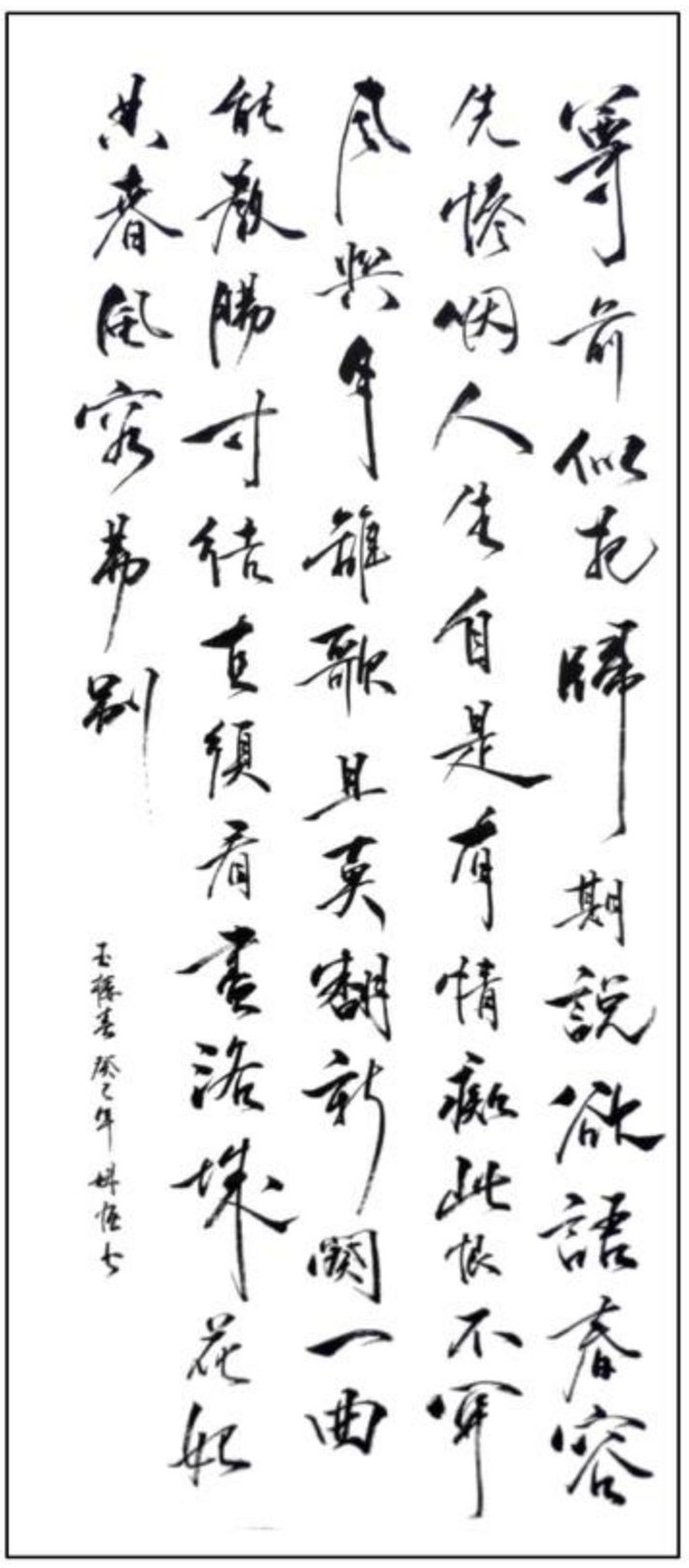


十三．閻妹恒　一回生

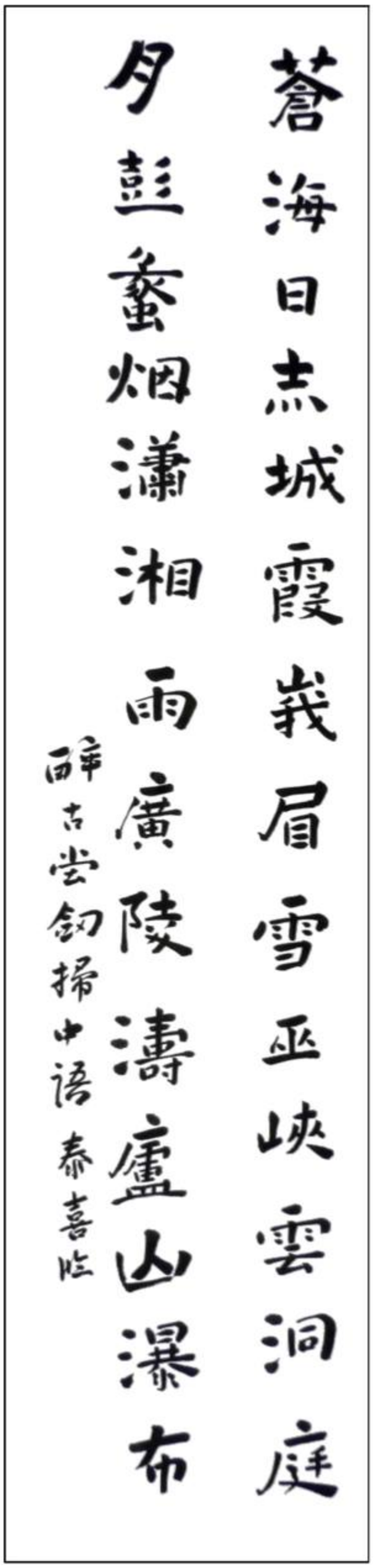
創作　行書　『玉樓春』　全紙

「尊前擬把帰期説欲語春容先慘咽　人生自是有情痴　此恨不関風與月　離歌且莫翻新闋一曲能教腸寸結　直須看盡洛城花　始共春風容易別」

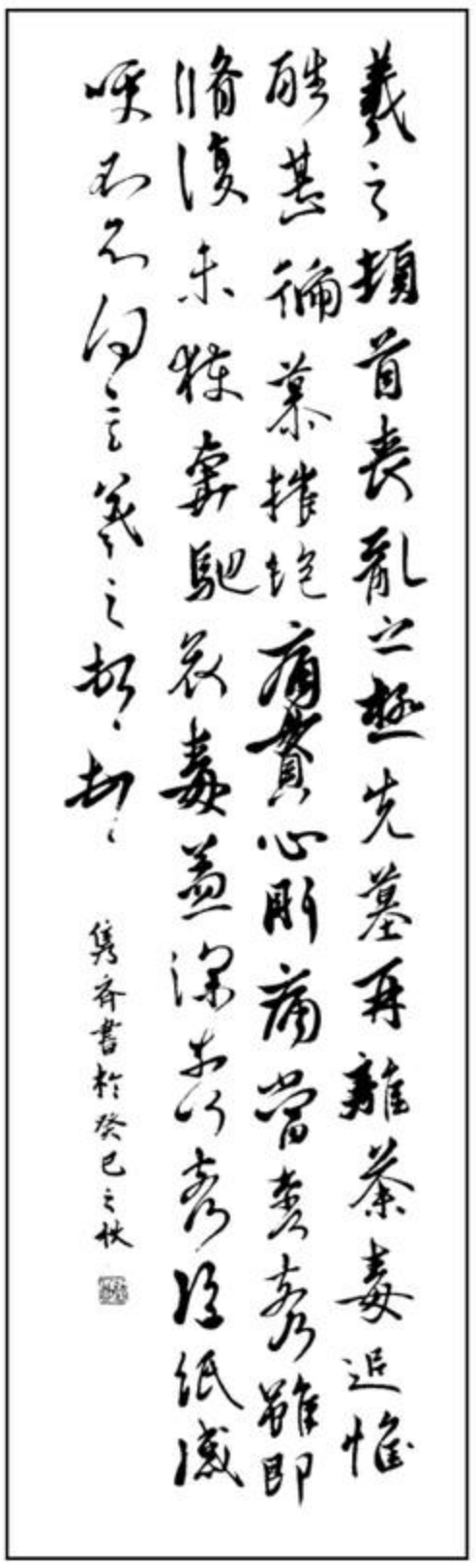
ただ「人生には情痴があり、それは風月に関わらず」という気持ちが好きです。



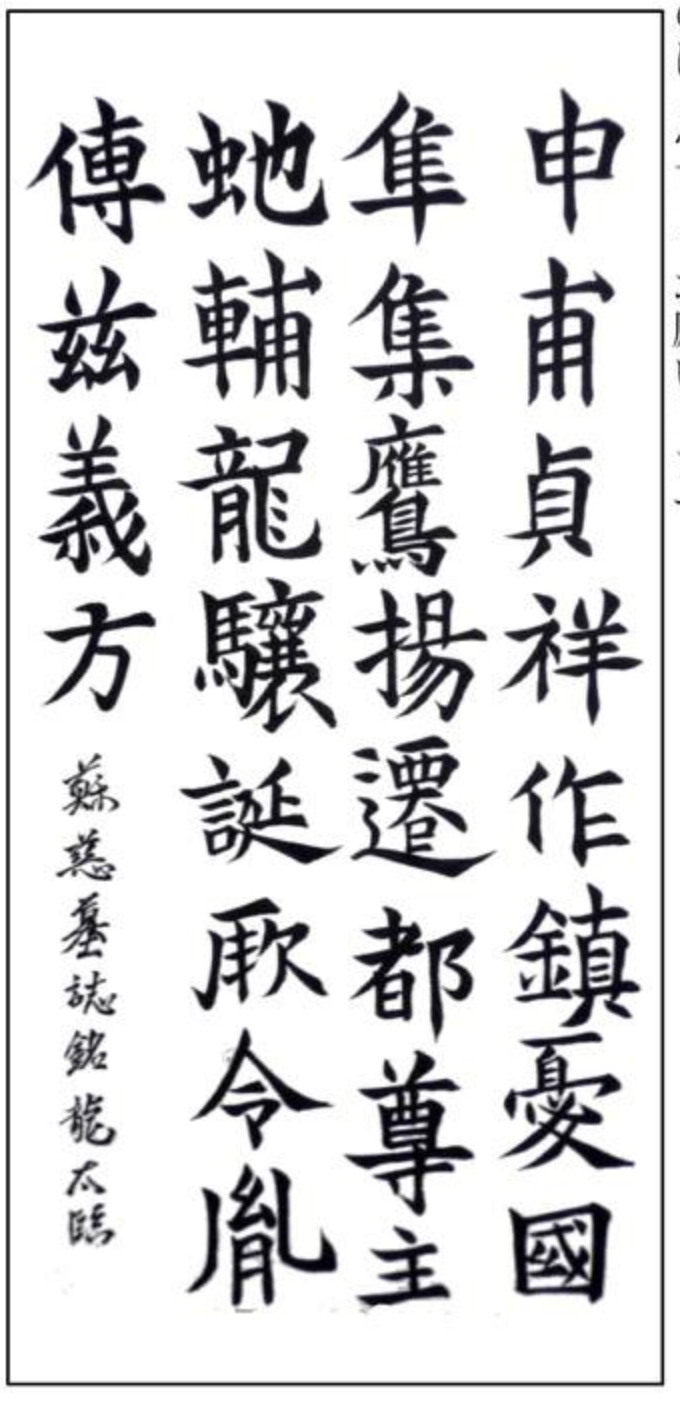
十四．牛山泰喜　一回生
臨書　楷書　川村驥山　『醉中堂劍掃中語』　二八
「蒼海日赤城霞峨眉雪巫峡雲洞庭月彭蠡煙瀟湘雨廣陵濤盧山瀑布」
川村驥山は長野県にゆかりのある現代の書家で、昔本で読んだときにこの作品が載っていて面白いなと思い今回の機会に臨書しました。この作品の柔らかく面白い点や線を感じてい頂ければ幸いです。



十五．王隽斉　二回生
臨書　行書　王羲之　『喪乱帖』　半切
「羲之頓首喪亂之極先墓再離荼毒追惟酷甚号慕摧絶痛貫心肝。痛当奈何奈何。雖即修復未獲奔馳哀毒益深奈何奈何臨紙感哽不知何言。羲之頓首頓首。」
王羲之の書は元々自由奔放であると思いますが、この『喪乱帖』は戦争に対する怒りと悲しみといった激しい感情をあらわすものであるため、もっと自然な、本源的な書にみえると思います。『喪乱帖』を臨書する際、それらのことを考えながら書くのが難しいのだが楽しく感じました。



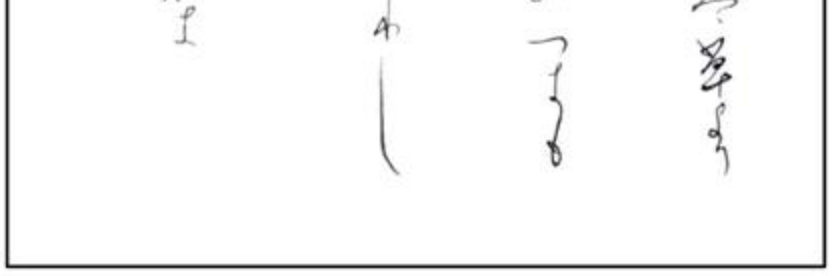
十六．大石龍太　二回生
臨書　楷書　『蘇慈墓誌銘』　全紙
「申甫貞祥作鎮憂國隼集鷹揚遷都尊主蛇輔龍驤誕厥令胤傳茲義方」
蘇慈墓誌銘を臨書しました。練習不足です…。一つ一つの文字が微妙に傾いており字形を再現しきれませんでした。今回は枠いっぱいに書くことはせず、すっきりさせることを心掛けました。こういう作風もいいなぁと思えました。ご品評のほど宜しくお願いします。



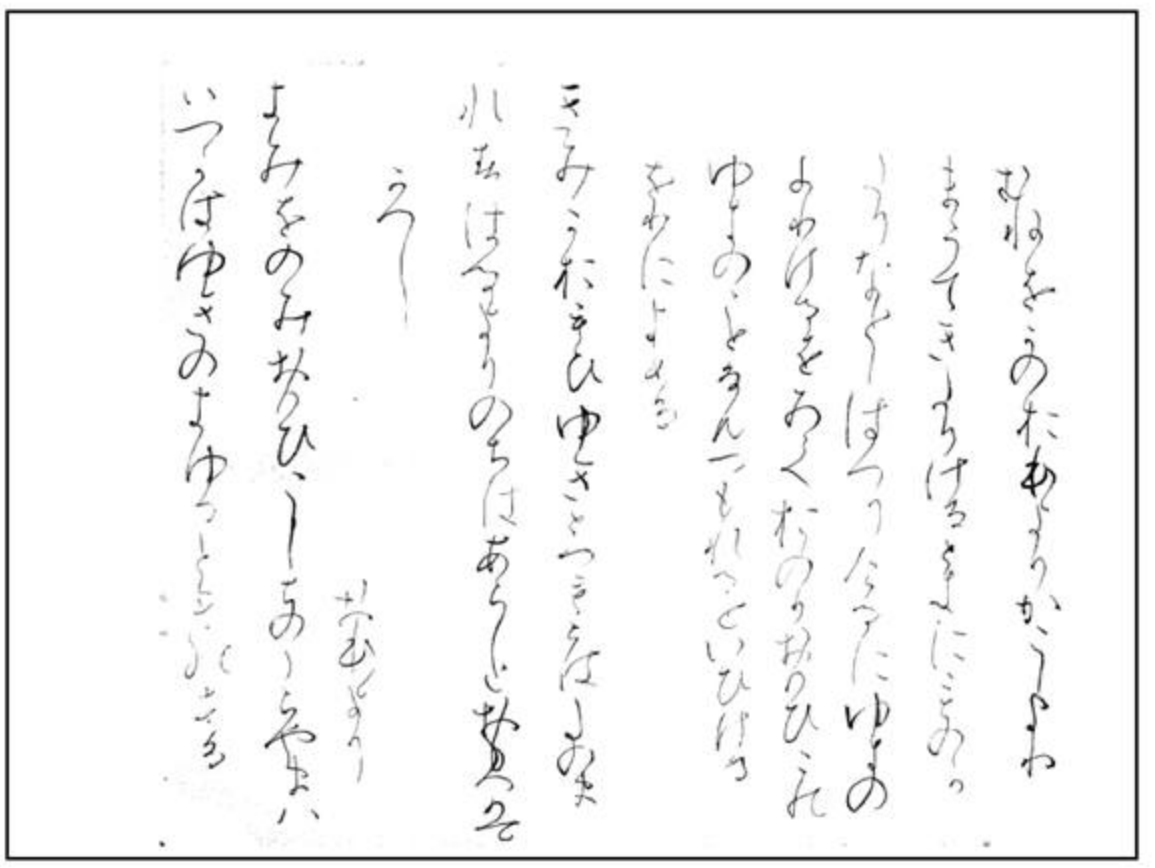
十七．　大泉陽輔　三回生
臨書　隷書　楊峴　『隷書文語四屏』　半切
「慶歴二年閏九月天章侍講王洙言國子監毎科詔下品官子弟試藝執牒充廣文」
まだ譲れない。



十八．太田悠子　四回生
臨書　かな　伝藤原行成筆　『針切』　半紙
「しもおか（可）ぬ人のこ（古）ゝろ（路）もいか（可）な（奈）れば（盤）草よりさき（支）に（尓）ま（万）づか（可）れぬらむ（無）・・・」
書き始めると一気に最後まで書いてしまう流れの良さが魅力の作品です。
伸びやかな線とくるりと回る線がバランス良く出てくるので、見ていても書いていても飽きない作品に仕上がるように、と思って書いてきました。



十九．岡本悠　二回生
臨書　かな　伝紀貫之　『高野切第三種』　半懐紙
「むねをか(可)のを(於)ほ(本)よりが、こしより(利)まうできた(多)りけるとき(支)に(以下略)」
久しぶりにかなを書きました。時間がいくらあってもたりないです。



二十．小野愛実　四回生
臨書　行書　董其昌　『日月詩巻』　全紙
「英壇上夜半東方明仙鐘撞々迎海日海中離々三山出霞梯赤城遙可分霓旌絳節」
学部生最後の作品、今まで書いたことのなかった全紙に書きました。楽しんで書けましたが、董其昌らしさを出すのは難しかったです。全体を通して流れが感じられるように書きたいと思いつつ、苦労しました。これからも精進していきたいです。

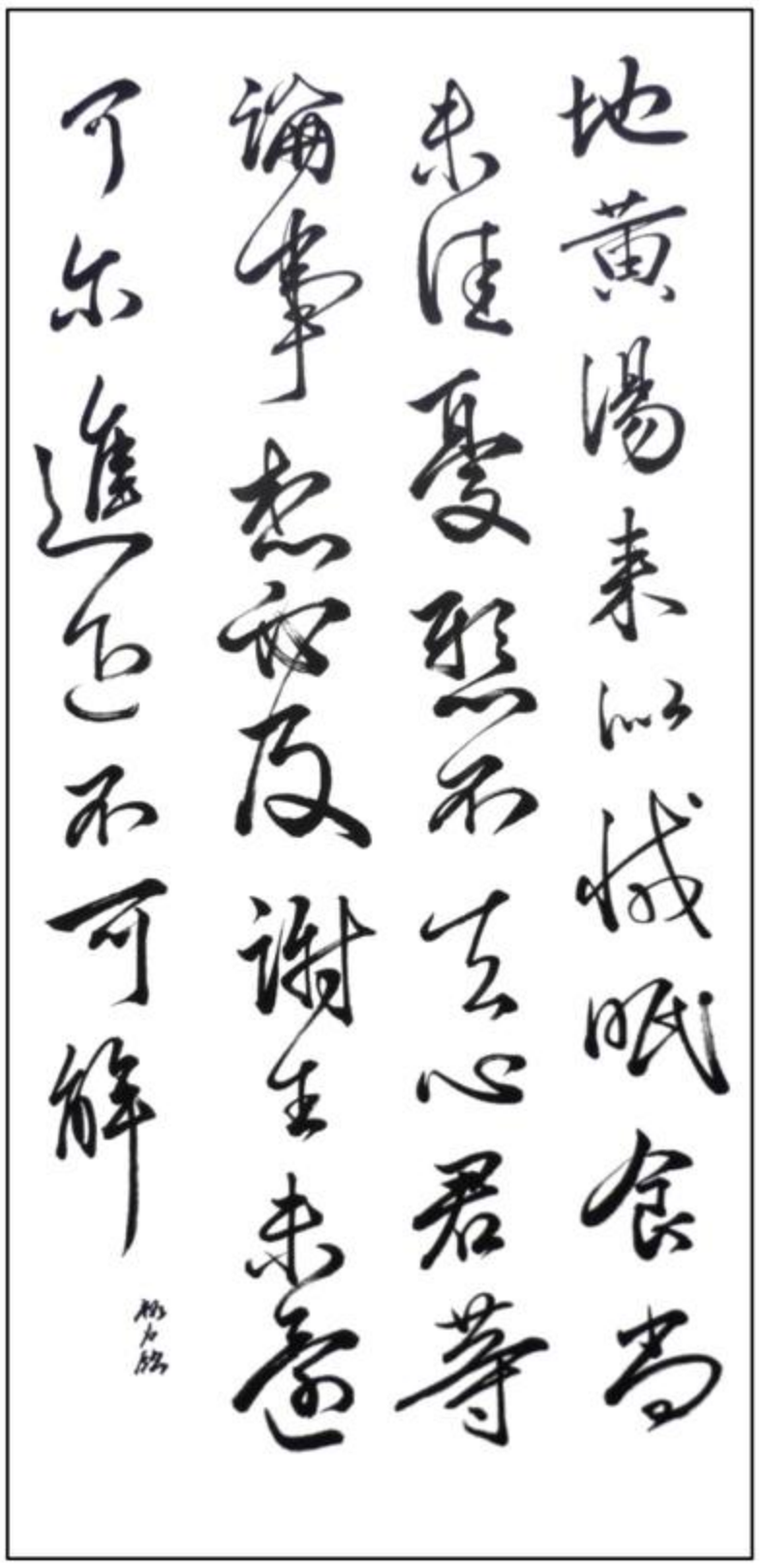


二十一．角谷遊野　一回生
臨書　楷書　褚遂良　『楷書千字文』　半切
「意移堅持雅操好爵自縻都邑華夏東西二京背邙面洛浮渭據涇宮殿盤樓觀飛」
褚遂良の字が好きです。こんな字を自由自在に書けるようになりたいです。



二十二．大庭諒介　四回生
創作　仏語書・水墨画　『巡礼の地』　五尺×五尺
「Demandez et l'on vous donnera, cherchez et vous trouverez, frappez et l'on vous ouvrira（求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出されん。叩けよ、さらば開かれん。）」
学部（工・建築）最後の節目の作品として「建築のある水辺の風景」を描きたくて、題材にフランスのモン・サン＝ミッシェルを選びました。隣の言葉は、巡礼の地に似つかわしいと感じた聖書の言葉です。これからの将来への祈りとして、また非日常なるものを体感して頂けるように、この作品を提案いたします。





二十三．片野裕太　二回生
臨書　行草　王献之　『地黄湯帖』　全紙
初めて全紙に挑戦しました。五行構成が難しくて投げ出したくなったことも多々ありました。なにより、半切に比べ一枚書くのに疲れました。当分大きい紙からは距離を置こうと思います。



二十四．加藤大智　一回生
臨書　楷書　欧陽詢　『九成宮醴泉銘』　半切
「日含五色烏呈三趾頌不輟工筆無停史上善降祥上智斯悦流謙潤下潺湲皎潔」
書くのが遅いと大変です。御批評よろしく御願いします。



二十五．釜阪紘平　一回生
創作　行書　ビロードベニヒダタケ　『天鵞絨紅襞茸』　半切
日本の毒きのこ」という図鑑を読んでいたとき、和名の漢字表記がやたらとかっこいい毒きのこを見つけたので、それで創作してみました。何はともあれ、僕にしか書けない作品ができたと思います。これからも、きのこの勉強をがんばりたいとおもいます。あと、書道も。



二十六．河合翼　二回生
臨書　行書　董其昌　『菩薩蔵経後序』　半切
「蓋聞義皇至賾精粋止於亀文…」
意臨しました。不慣れな行書ですが丁寧に滑らかにを意識しました。字の形や構成も気に入ってます。至らないところを是非ご指摘お願いします。

二十七．河合翼　二回生
創作　楷書　『黙如雷』　半切
「黙如雷」
楷書の逆入平出という書法で書きました。黒雲の中で静かながらも存在感、威圧感を放っている落ちる前の雷をイメージして書きました。「雷」の荒々しさを中心に遠くからも近くからも見ていただけたら嬉しいです。



二十八．河原理恵　二回生
創作　行書　『進』　全紙
「進」
後付けではありますが、「進」は私の父親の名前でもあります。



二十九．菊池悠里　三回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切
「四方逮乎立年撫臨億兆始以武功壹海内終以文徳懐遠人東越青丘南踰丹徼皆」
ずっと避けていた楷書。高校の書道の教科書にも載っているほど有名な作品を臨書するのは色々な意味で緊張しましたが、原本に対して誠実であることだけを心がけました。



三十．北堀雄大　二回生
臨書　楷書　歐陽詢　『九成宮醴泉銘』　半切
「百尋下臨則崢嶸千仞珠璧交映金」
楷書まだがんばれます。がんばります。



三十一．藏岡凌平　一回生

臨書　楷書　鄭道昭『鄭羲下碑』　半切

「樂道據德依仁孝弟端雅寡言愍行六籍孔精百氏備究八素九丘靡不昭達至乎人倫禮式陰陽律曆尤所留心」

よく見るいわゆる楷書とは明らかに違う線質ながら、かつ美しい字が形作られているところに惹かれ『鄭羲下碑』を臨書しました。篆隷と見紛うような始筆・終筆、線の独特な曲がり、微妙な太さの変化……と、書く身としては案の定次々と難点に出くわす道のりでしたが、そこが書の面白さでもあると感じました。



三十二．小島健史　二回生

創作　前衛　『溶岩』　半切四分の一

「爆」

底に溜まったエネルギーが、連鎖の上で漸く噴火する。そんなイメージが皆様に伝わったならば、この作品は完成です。

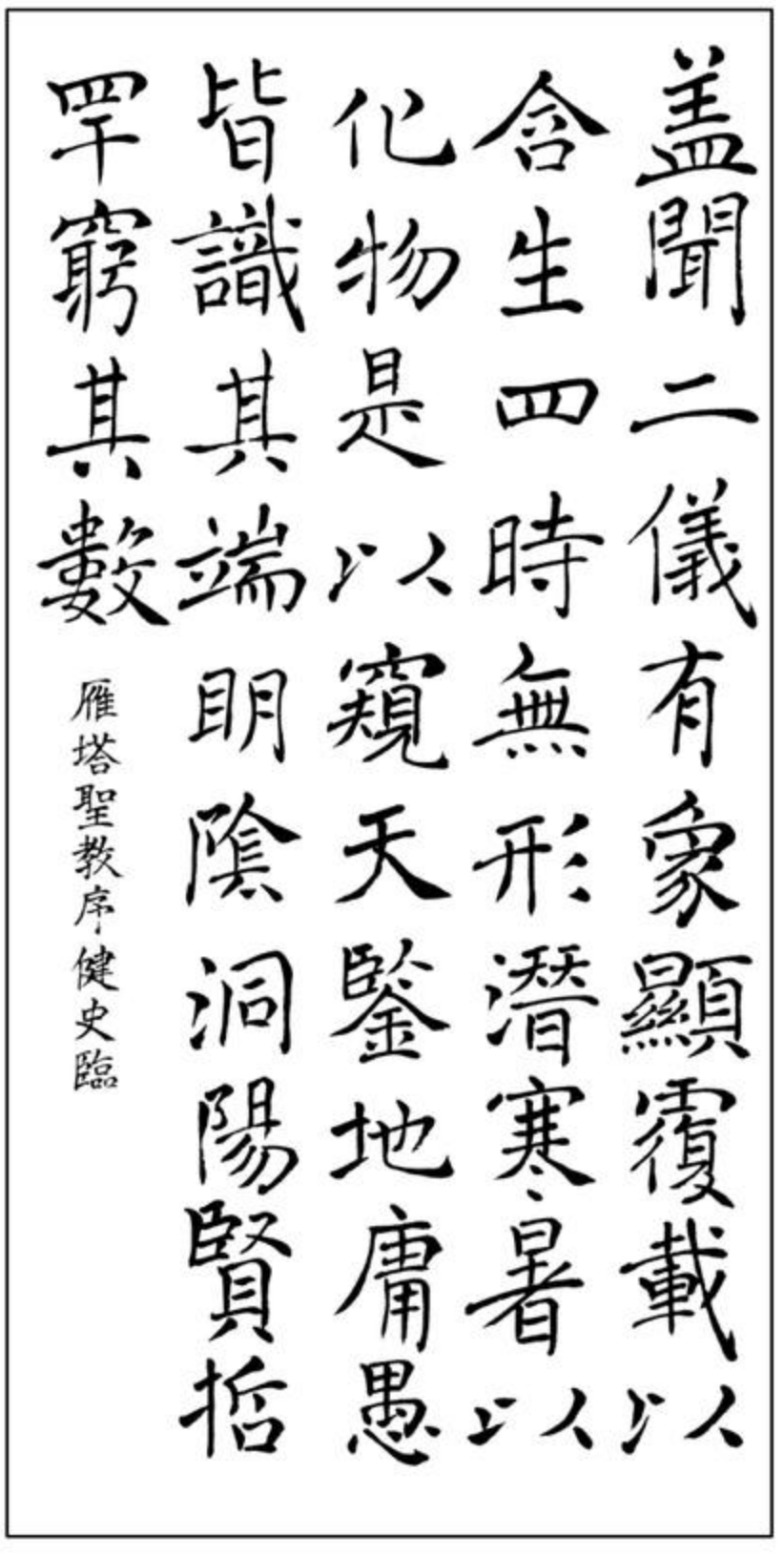


三十三．小島健史　二回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　全紙

「蓋聞二儀有象顕覆載以含生四時無形潜寒暑以化物是以窺天鑒地庸愚皆識其端明陰洞陽賢哲罕窮其數」

大学入学から書道を始め、最初に書き上げた書道作品が『雁塔聖教序』の臨書でした。半年も練習して出展したその作品は決して納得の出来るものではなく、その後も一年間書道を学び、もう一度「楷書の最高傑作」に挑戦をさせて頂きました。一先ずは成長出来ているのかな、と思いますが、まだまだ至らぬ点ばかりです。ご批評の程よろしくお願いいたします。



三十四・河原理恵　二回生

臨書　楷書　『魏霊蔵薛法紹造像記』　三尺×八尺

「下代茲容厥作鉅鹿魏霊蔵河東薛法紹二人等乖豪光」

とにかく迫力のある作品を作りたいという思いから、造像記を三尺×八尺の紙に書き額に入れて展示しました。払いや横画の伸びやかさを残しつつ、始筆や点画・右上がりの角度を強調して書き、力強さを表現しました。



三十五．小松聡子　三回生

臨書　隷書　鄧石如　『隷書崔子玉座右銘』　全紙

「無道人之短。無説己之長。施人慎勿念。受施慎勿忘。世誉不足慕。唯仁為紀綱。隠心而後動。謗議庸何傷。無使名過実。守愚聖所臧。在涅貴不緇。曖曖内含光。柔弱生之徒。老氏誡剛強。行行鄙夫志。悠悠故難量。慎言節飲食。知足勝不祥。行之苟有恒。久久自芬芳。」

漢の政治家である崔瑗の座右の銘を鄧石如が書いたものを臨書しました。最初は一目惚れだったのですが、調べると素晴らしいことが書いてあると分かってますます好きになり、書いていてとても楽しかったです。言を慎み飲食を節し、足るを知りて不祥に勝つ…。なんだかできていないことばかりな気がしますが、これから精進していきたいです。



三十六．柴田翔　三回生

創作　書体無し　『環　―めぐる―』　90cm×60cm

「環」

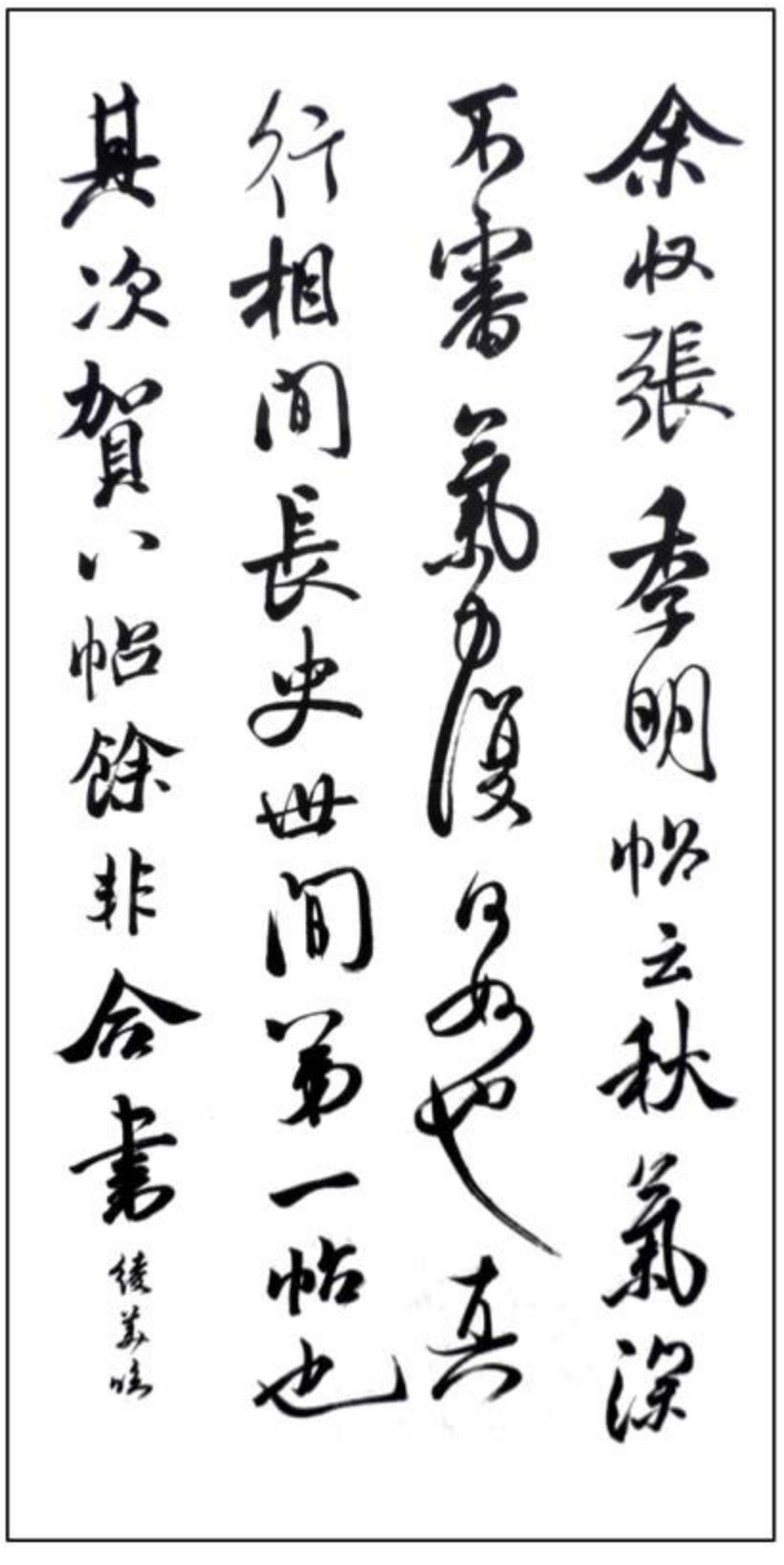
年は終わりを迎えても、季節はめぐり繰り返す。季節のみならず、自然界のあらゆるもの――土・水・大気、天体、或いは血液――は、循環するのが常である。ある者曰く、歴史も繰り返すものらしい。またある者曰く、衆生の魂さえ…

三十七．佐藤綾美　四回生

臨書　行書　米芾　『張季明帖』　全紙

「余収張季明帖云秋氣深不審氣力復何如也眞行相間長史世間第一帖也其次賀八帖餘非合書」

自分の勉強不足、努力不足は否めませんが、卒業制作となる今回の書展で、一番好きな米芾さんの字を臨書できたことはとても嬉しいです。



三十八．白谷暢浩　一回生

臨書　かな　藤原行成　『針切』　半紙四枚継ぎ

「ふ(婦)か(可)き(支)山にて、風のおとの心ほ(本)(そき)ことな(奈)といひはべりて

山風のは(者)げ(希)しき(支)ことを(乎)な(那)げ(介)き(支)つゝな(奈)みだ(堂)にのみもひ(悲)を(乎)くらす(春)か(可)な(那)・・・」

藤原行成の針切を臨書しました。針切の特徴である名前通りの針のような鋭さを表現するのが難しかったのですが、少しずつ慣れてきました。しかしながらまだまだ未熟な部分も多々あります。これからも仮名の美しさを味わいつつ鍛錬を続けていきたいと思います。





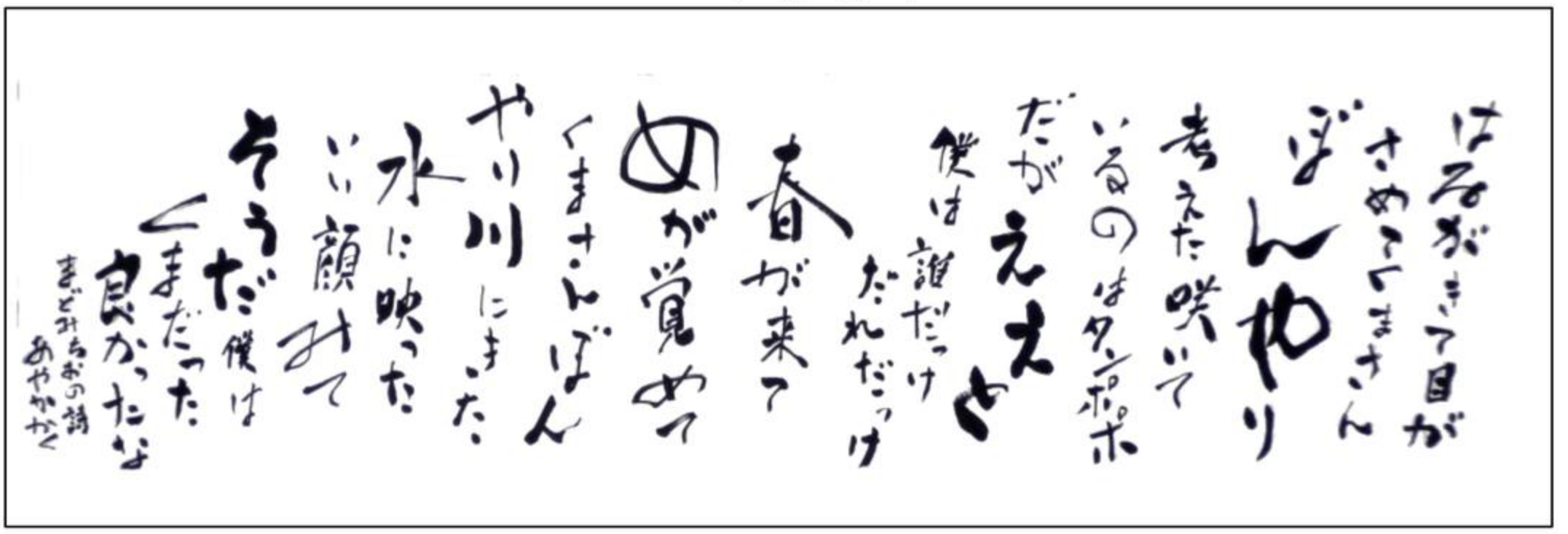
三十九．神保里帆　一回生
臨書　楷書　光明皇后　『楽毅論』　半切
「夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂廻而難通然後已焉可也今楽氏之趣或者其未尽乎而多劣」
何ヵ月か書いてからようやく原本通りに書くことの大切さに気づかされた作品です。楽毅論らしい字体に見えていれば幸いです。

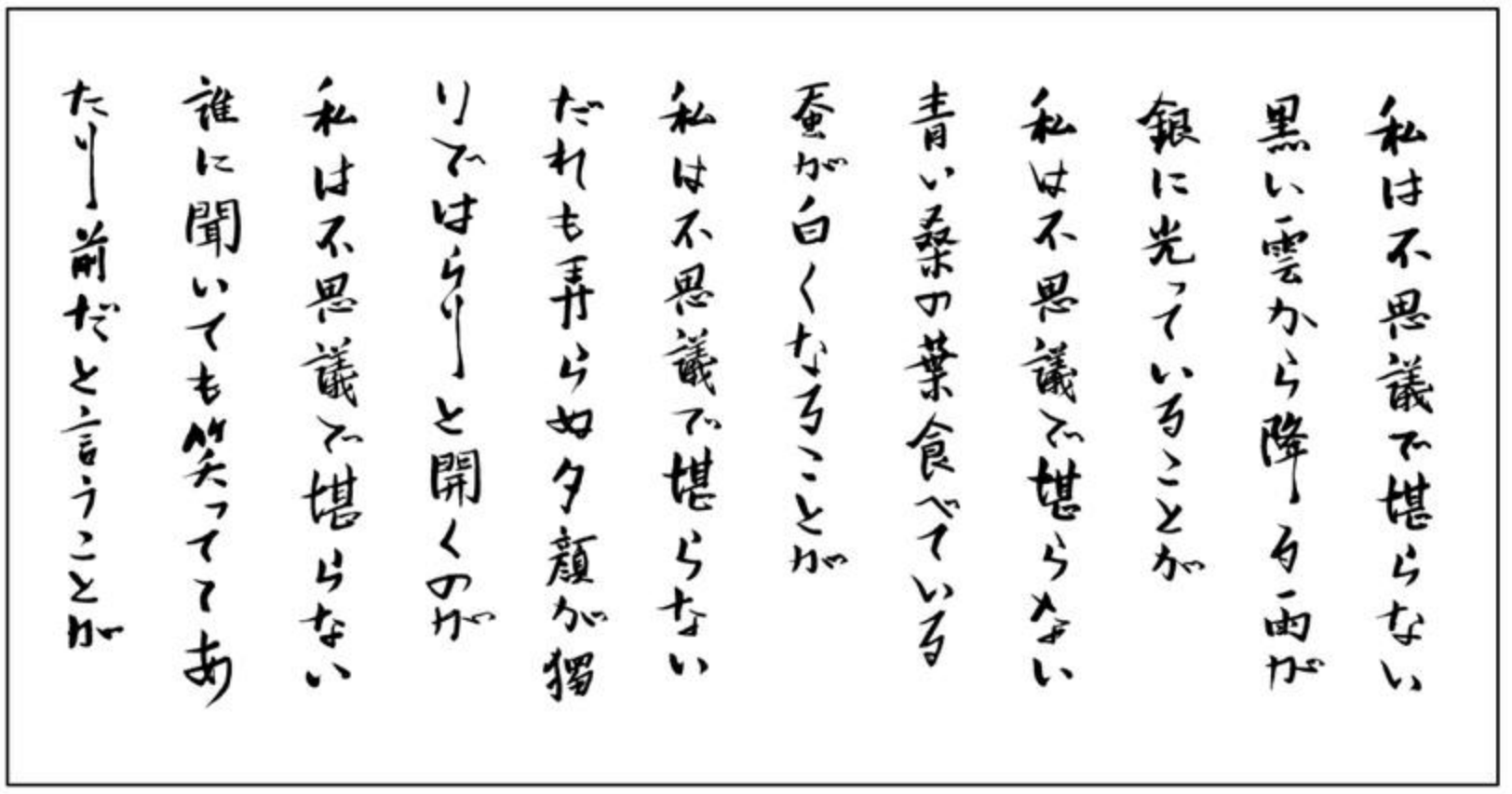


四十．鈴木貴也　三回生
臨書　行書　徽宗　『蔡行勅巻』　半切
「成職不有総難以集序朕肇建網領之官」
一文字一文字がそれだけで作品にできそうな、原本の右上がり気味な字形と、鋭い線筆の格好良さから衝動的に題材を決めました。その感動を伝えることができれば幸いです。ご批評よろしくお願いいたします。

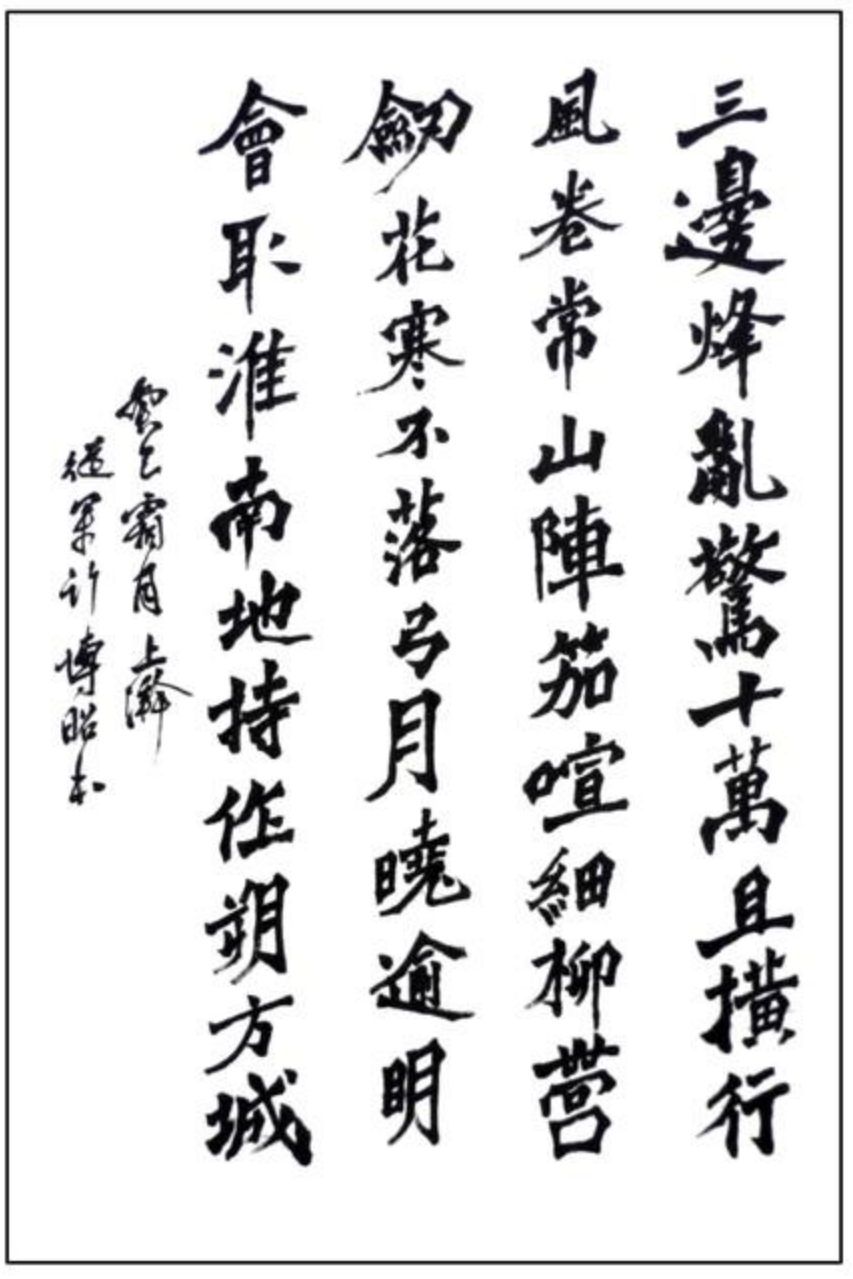


四十一．杉本綾香　四回生
創作　調和体　『くまさん』　半切
「はるがきて　目がさめて　くまさんぼんやり　考えた　咲いているのはタンポポだが　ええと　僕は　誰だっけ　だれだっけ　春が来て　めが覚めて　くまさんぼんやり　川に来た　水に映ったいい顔みて　そうだ　僕は　くまだった　良かったな」
この字体も半切横という形式も私にとっては挑戦でしたが、「くまさん」の言葉のあたたかさや心地よさを表現してみたくて創作しました。どの文字も個性があって楽しいリズミカルな作品イメージです。まだまだ寒い季節ですが、ぼんやりしつつも早く春を待とうかなと思います。



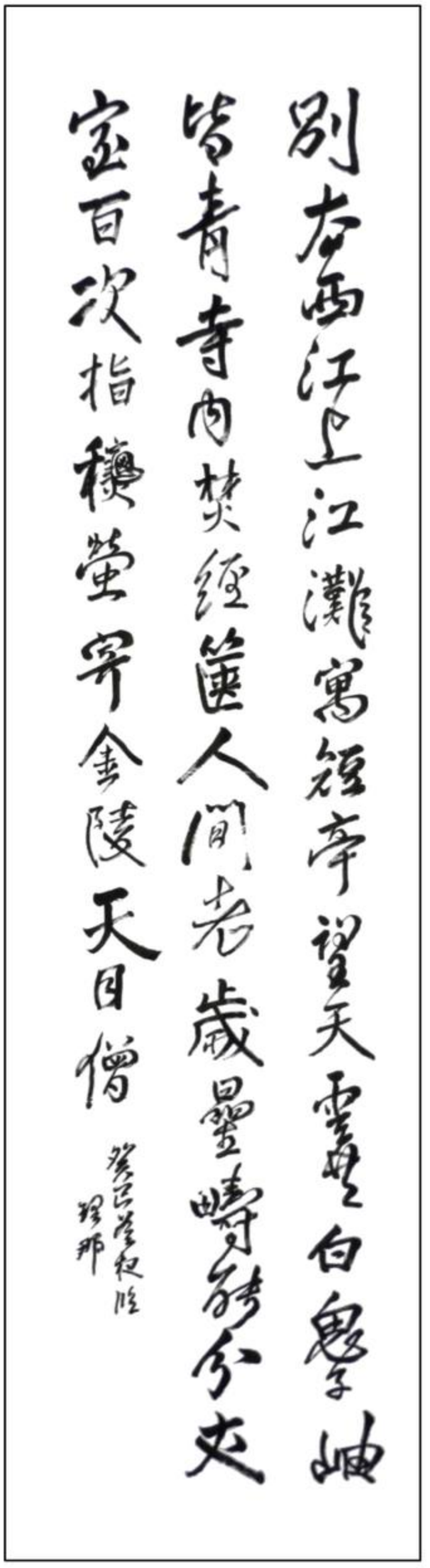

私は不思議で堪らない
黒い雲から降る雨が
銀に光っていることが
私は不思議で堪らない
青い桑の葉食べている
蚕が白くなることが
私は不思議で堪らない
だれも弄らぬ夕顔が独
りではらりと開くのが
私は不思議で堪らない
誰に聞いても笑ってて
たり前だと言うことが

四十二．鈴木新人　四回生
創作　調和体　『不思議』三尺×六尺
「私は不思議で堪らない　黒い雲から降る雨が　銀に光っていることが　私は不思議で堪らない　青い桑の葉食べている　蚕が白くなることが　私は不思議で堪らない　誰も弄らぬ夕顔が　独りではらりと開くのが　私は不思議で堪らない　誰に聞いても笑ってて　当たり前だと言うことが」
調和体というと、漢字と仮名が両方あって難しそうでしたが、あえて挑戦しました。質の高いものになっていれば幸いです。

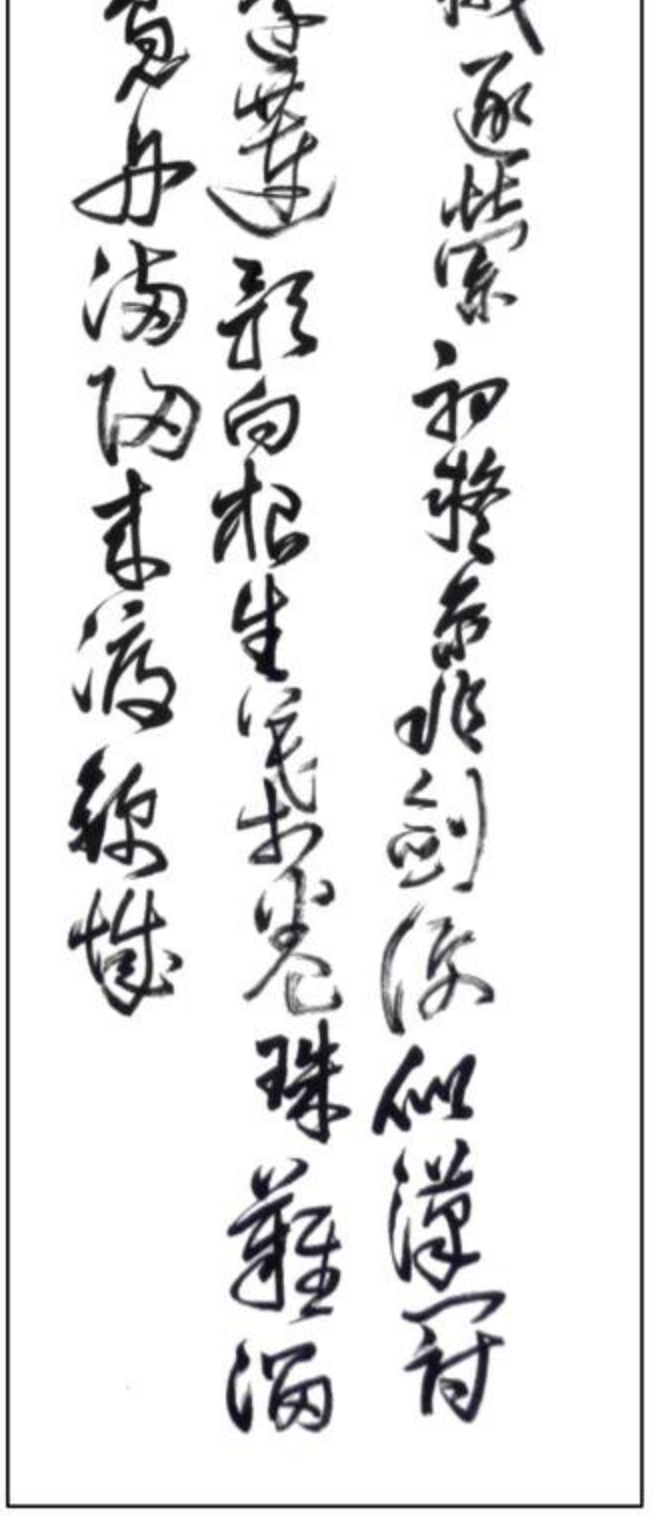

三邊烽亂驚十萬且橫行
風卷常山陣笳喧細柳營
劒花寒不落弓月曉逾明
會取淮南地持作朔方城
鄧石如書并識
從軍行　楷書

四十三．石博昭　二回生
創作　楷書　『従軍行』　二尺×三尺
「三邊烽亂驚　十萬且横行　風巻常山陣　笳喧細柳営　劒花寒不落　弓月暁逾明　會取淮南地　持作朔方城」
少ないながらも、自分の臨書経験を消化する為に創作をした。北魏楷書らしさとは何か、という自問に答えが出せていれば幸いである。

四十四．篠原理那　一回生
臨書　草書　王鐸　『寄金陵天目僧詩』　二尺×八尺
「別去西江上江灘寓短亭・・・」
初めての二八作品で、以前から書きたかった王鐸の書を臨書しました。文字の大小などの細かな特徴を捉えながらも一つの作品にまとめあげるのに苦労しました。
まだまだ稚拙な点は多いですが、ご批評のほどよろしくお願いします。



四十五．鈴木新人　四回生
創作　草書　『採蓮曲』　二尺×八尺
「江南當夏清桂檝逐流縈初疑京兆劍復似漢冠名荷香帶風遠蓮影向根生葉卷珠難溜花舒紅易傾日暮鳧舟滿歸來渡錦城」
以前までは、紙と向かい合ってからはじめて、筆を紙に〝合わせて〟書くという心構えでありましたが、紙と向かい合うまでにどのような〝準備〟をしてきたのかで作品の質が大きく変わるのだということを知りました。



四十六．宗哲仁　一回生

臨書　行書　王羲之　『蘭亭叙』半切

「會稽山陰之蘭亭修禊事也羣賢畢至」

羣、賢、畢の三文字が魅力的に思えたので、この部分を書きたいと思いました。構成がなかなか決まらず苦労しましたが、作品を出すのもこれで二度目となり、初めての時のよりはどっしり構えて書くことができたと思います。未熟な作品ですがどうぞよろしくお願いします。



四十七．辰巳鴻介　二回生

臨書　楷書　呉熙載　『楷書東方朔画賛四屏』　半切

「故談諧以取容潔其道而穢其跡清」

滲みと掠れがだしたかったんです



四十八．高垣茜　修士二回生

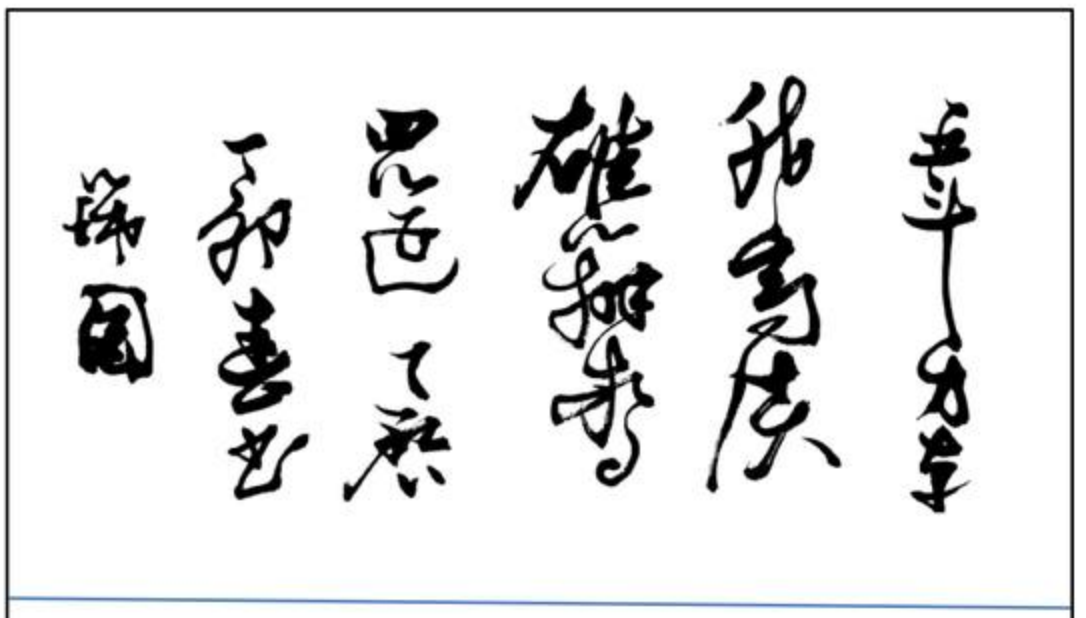
臨書　行草書　張瑞図（上）「杜甫飲中八仙歌巻」（下）「張瑞図詩巻」全紙1/2

「杜甫飲中八仙歌巻」五斗方卓然　高談雄辨驚四筵　天啓丁卯春書　瑞圖

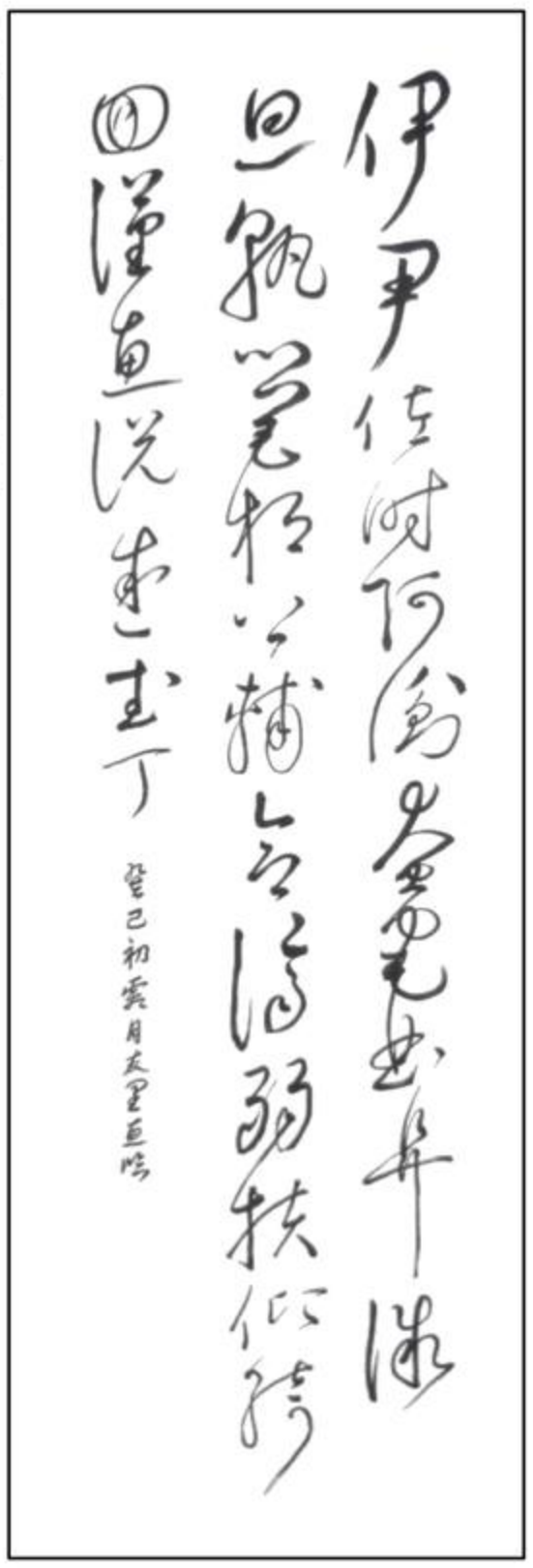
「張瑞図詩巻」　躇不忍下層崖　我意何異登天台　崇禎癸酉　白毫庵瑞圖

字は人の心を表すというが、その人が置かれている状況によって、あるいは齢を重ねるにつれてどう変わるのだろうか。

張瑞図に注目し、『杜甫飲中八仙歌巻』（五十八歳：政務を掌るかたわら書画の生活に明け暮れしていた頃、都の北京にて）と『張瑞図詩巻』（六十四歳：官位剥奪後、郷里にて）を対比させようと試みた。



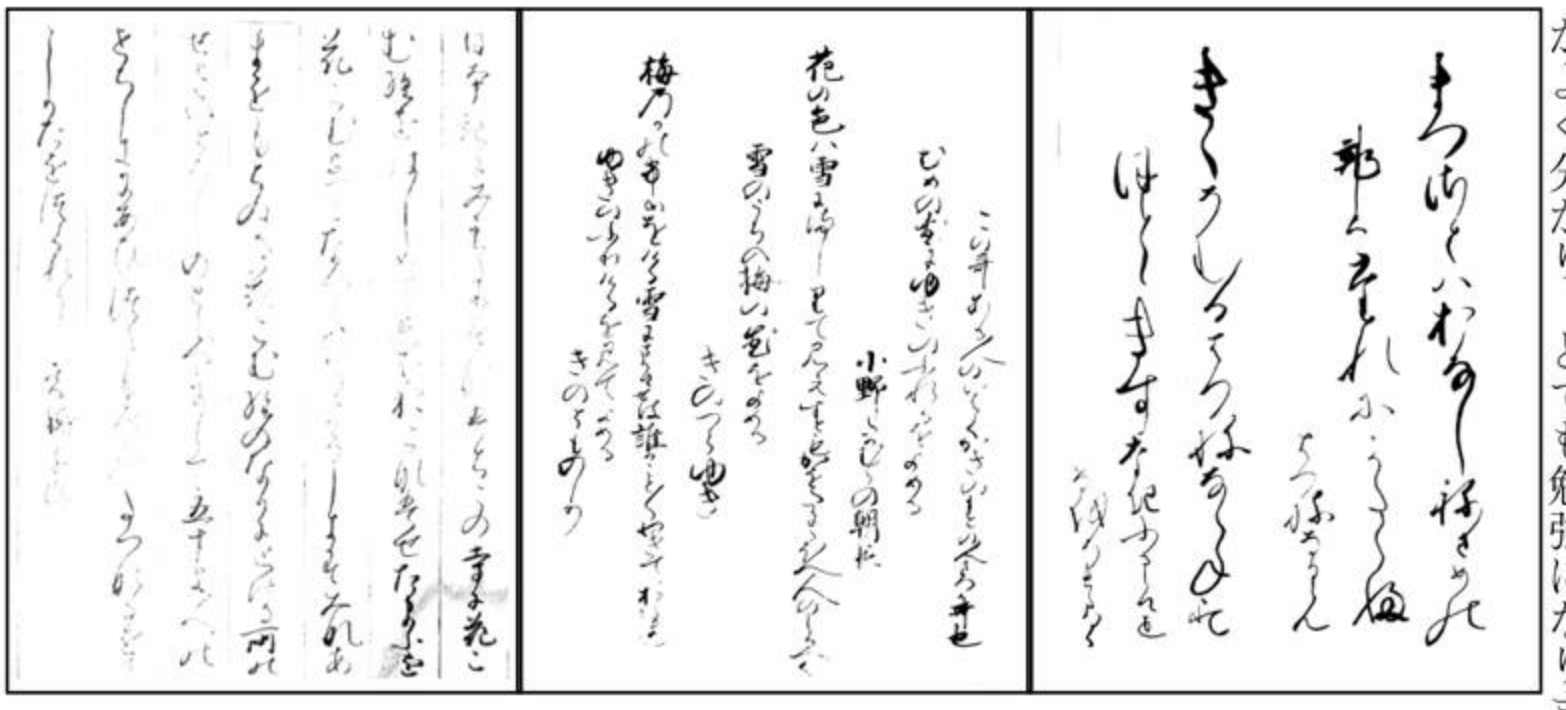
四十九．武井友里恵　四回生
臨書　草書　徽宗　『草書千字文(部分)』　約60 ㎝×190 ㎝
「伊尹。佐時阿衡。奄宅曲阜。微旦孰営。桓公輔合、済弱扶傾。綺回漢恵。説感武丁。」
最初は「作品集の表紙に載っていてかっこよかったから」という安易な理由で選びましたが、高校生のころからずっと書きたかった草書を書けてとても嬉しいです。集大成と呼ぶには少し力不足ではありますが、精一杯書くことができてとても楽しかったです。

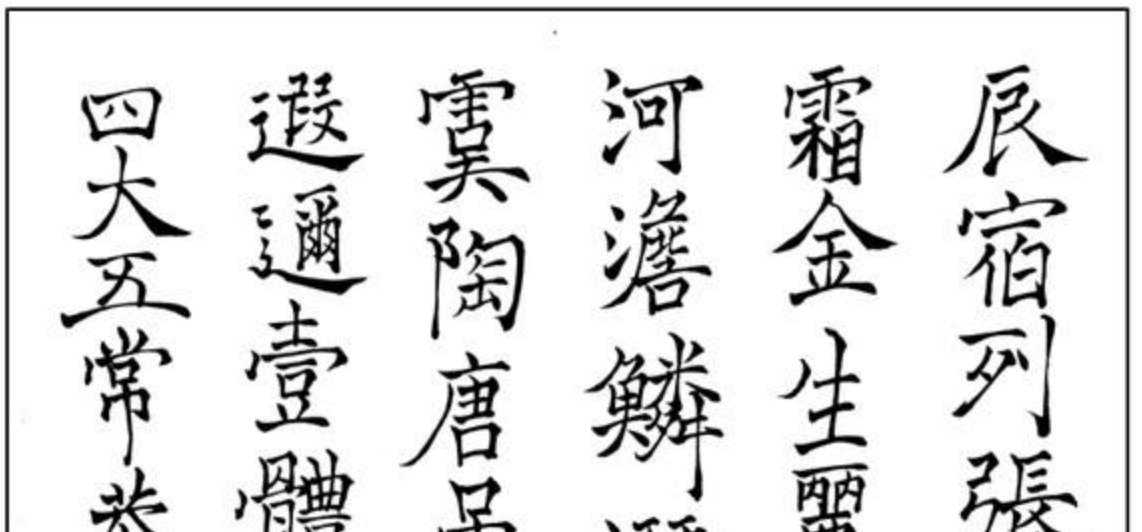


五十．多門千早　三回生
臨書　行書　黄庭堅　『王史二墓誌稿』　二尺×六尺
「人了元東林道人常摠皆攝杖屨往游其藩」
この原本の字の、柔らかいけれど凛としている、その二つの面が表現できたらと思い臨書しました。柔らかく優しいのだけど内にはぶれない芯の強さがあるというのは私の理想の人物像でもあります。ご批評のほどよろしくお願いします。



五十一．寺田実穂子　3回生
臨書　仮名　『金剛院切』　『三輪切』　『東大寺切』
H27.3 ㎝×W12.6 ㎝　H23.2×W14.6 ㎝　H25×W16 ㎝
「まつさとはおなしねさめの　郭公たれにかたらふ　はつねなるらん　ききそむるはつねならねと　ほとときすなきふるしても　なおそまたるる」
二百以上もの古筆が収められた手鑑「藻塩草」から三作品。手鑑に、集めた人の心を引き付けた古筆が詰まっているように、私も書きたいと思ったものを選ばせてもらいました。三枚を並行して書くことで、他で学んだことや書き方の違いがよく分かり、とても勉強になりました。

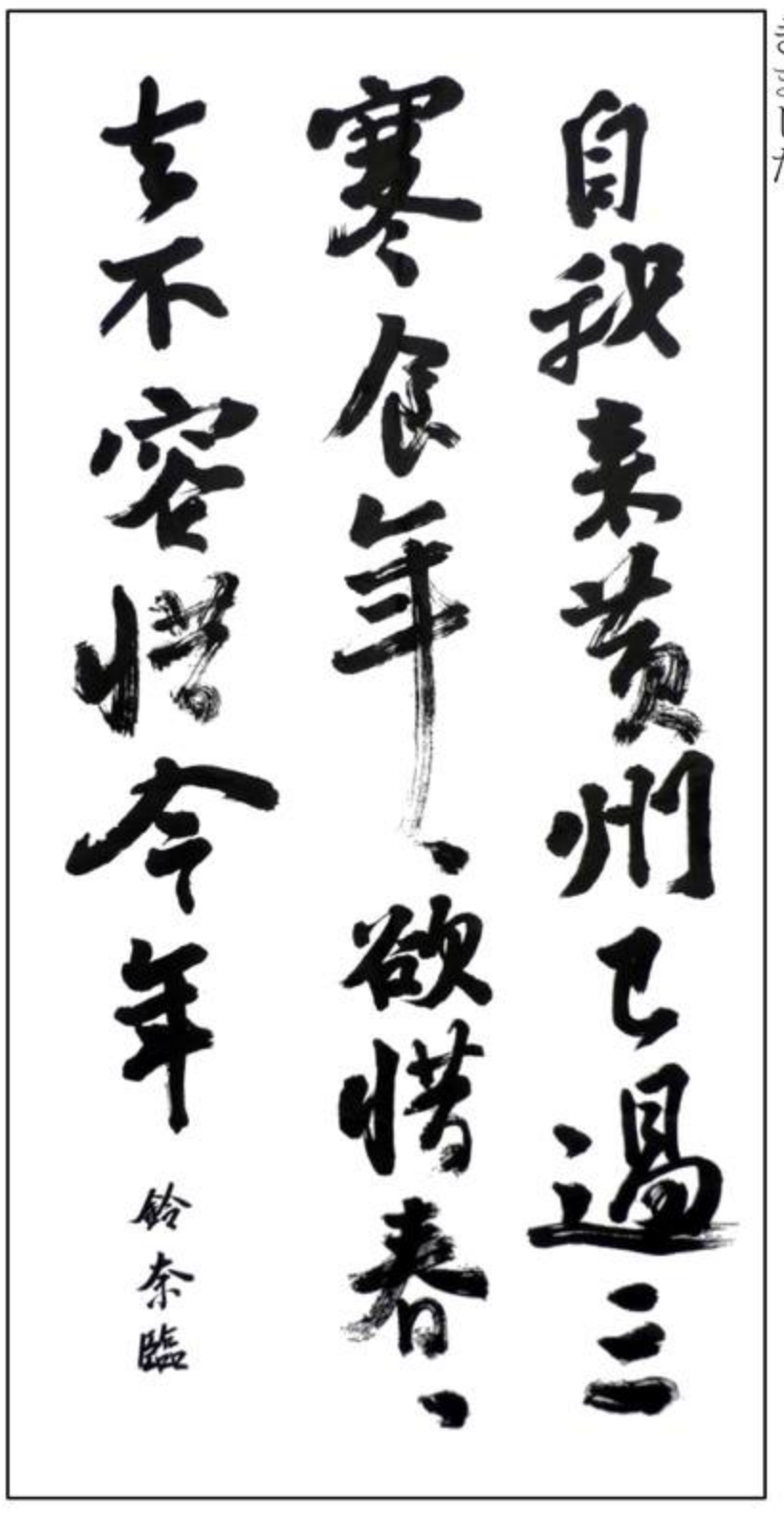




五十二. 辰巳鴻介　二回生
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　三尺×六尺
「辰宿列張寒来暑往秋収冬藏閏餘成歳律召調雲騰陽致雨露結爲霜金生麗水玉出
崑崗劒號巨闕珠称夜光果称李奈菜重芥薑海鹹河淡鱗潜羽翔龍師火帝鳥官人皇始
制文字乃服衣裳推位譲国有虞陶唐吊民伐罪周発殷湯坐朝問道垂拱平章育黎首臣
伏戎羌遐邇壹体率賓歸王鳴鳳在樹白駒食場化被草木頼及万方蓋此身髪四大五常
恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞絜男效才良知過必改得能莫忘罔談彼短靡恃己長信使可
覆器欲難量墨悲糸染詩讀羔羊景行維賢剋念作聖徳建名立形端表正空谷傳聲虚堂
習聽禍因悪積福縁善慶尺璧非寶寸陰是競資父事君曰嚴与敬孝当竭力忠則盡命臨
深履薄夙興温清似蘭」
楷書が好きです。大好きです。

五十三. 寺西幸　三回生
創作　かな　『伊吹山』　半切
「かくとた(多)に(二)　えや(哉)は(八)伊吹のさしも草　さ(沙)し(志)もしら
し(四)な(奈)もゆるおもひ(日)を(遠)」
すとん、とした和装のような雰囲気に仕上げたいと思って書きました。

五十四. 徳川鈴奈　一回生
臨書　行書　蘇軾　『黄州寒食詩歌巻』　全紙
「自我來黄州已過三寒食年々欲惜春々去 容惜今年」
縦に長い字を書きたいと思い、この法帖の「年」という字に惹かれ、これを書く
ことに決めました。全紙に三行書くのは初めてで、パンフレットの作品では、行
書特有の揺れが満足に書けなかったのですが、展示作品は、揺れに気を付けて書
きました。



五十五．中川和也　修士一回生
創作　草仮名　「雨が降らなくたって」　半切
「雷神少動雖不零吾将留妹留者（鳴る神の少し響（とよ）みて降らずとも吾は留まらむ妹し留めば）」
「雷神」はカミナリ。「科学」が幼稚だった古代のオジョウサマには、さぞ恐ろしいものだったはずだ。――それでも彼女は雷雨を望む。「鳴る神の少し響みてさし曇り雨も降らぬか君を留めむ（万葉集・巻11・3514）」…雨が降ってきたらサ、もうちょっとココにいてくれる？…。…雨が降らなくたって、君が「行かないで」って言ってくれるなら。…
――イジワルだなぁ。と思ってしまう。



五十六．永溝聡士　修士一回生
臨書　行書　文徴明『南樓傷春詩』　一尺×五尺
「南樓三月盡飛絮滿江城野色烟中斷斜陽雨外明帖鐃簷風燕燕千樹煖鶯鶯歲有傷春感兼茲白髪生」
なかなかうまくいかないですね。



五十七．中谷百花　二回生
創作　行書　『静夜思』　半切四連
「牀前看月光　疑是地上霜　擧頭望山月　低頭思故郷」
月っぽい作品を書いてみたいと思い、李白の静夜思という漢詩を題材に創作しました。窓から差し込む月の光を見て、その白く美しい輝きをきっかけに故郷のことを思い出した、という内容です。静かで神秘的な月の魅力が作品を通して伝わればうれしいです。

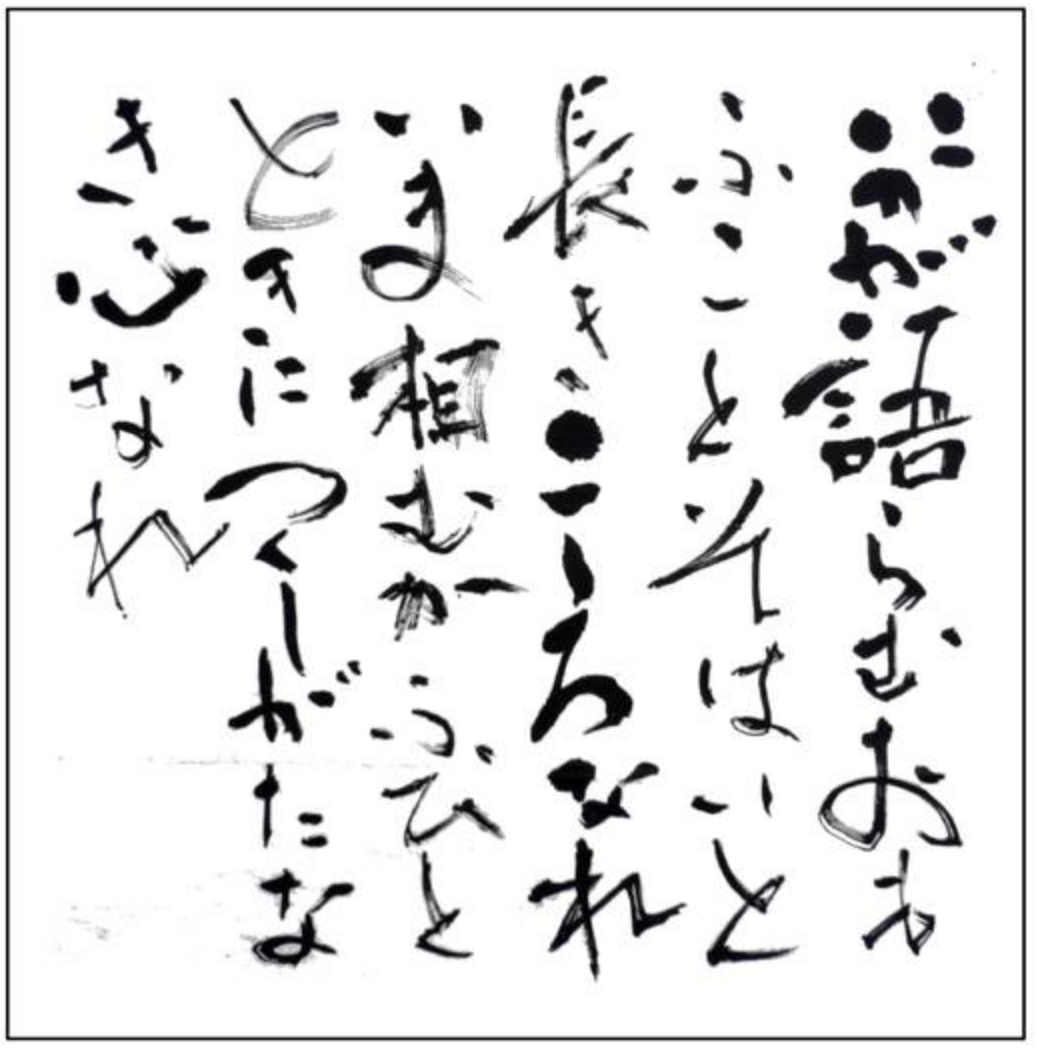


五十八．　中谷百花　二回生

創作　調和体　『いかが語らむ』　全紙二分の一

「いかが語らむ　おもふこと　そはいと長きこゝろなれ　いま相むかふひとときにつくしがたなき心なれ」

与謝野晶子の詩篇『恋衣』より、「いかが語らむ」の冒頭部分を、ぽつ、ぽつと女の子の口からこぼれ出るようなイメージで書きました。ご批評よろしくお願いします。

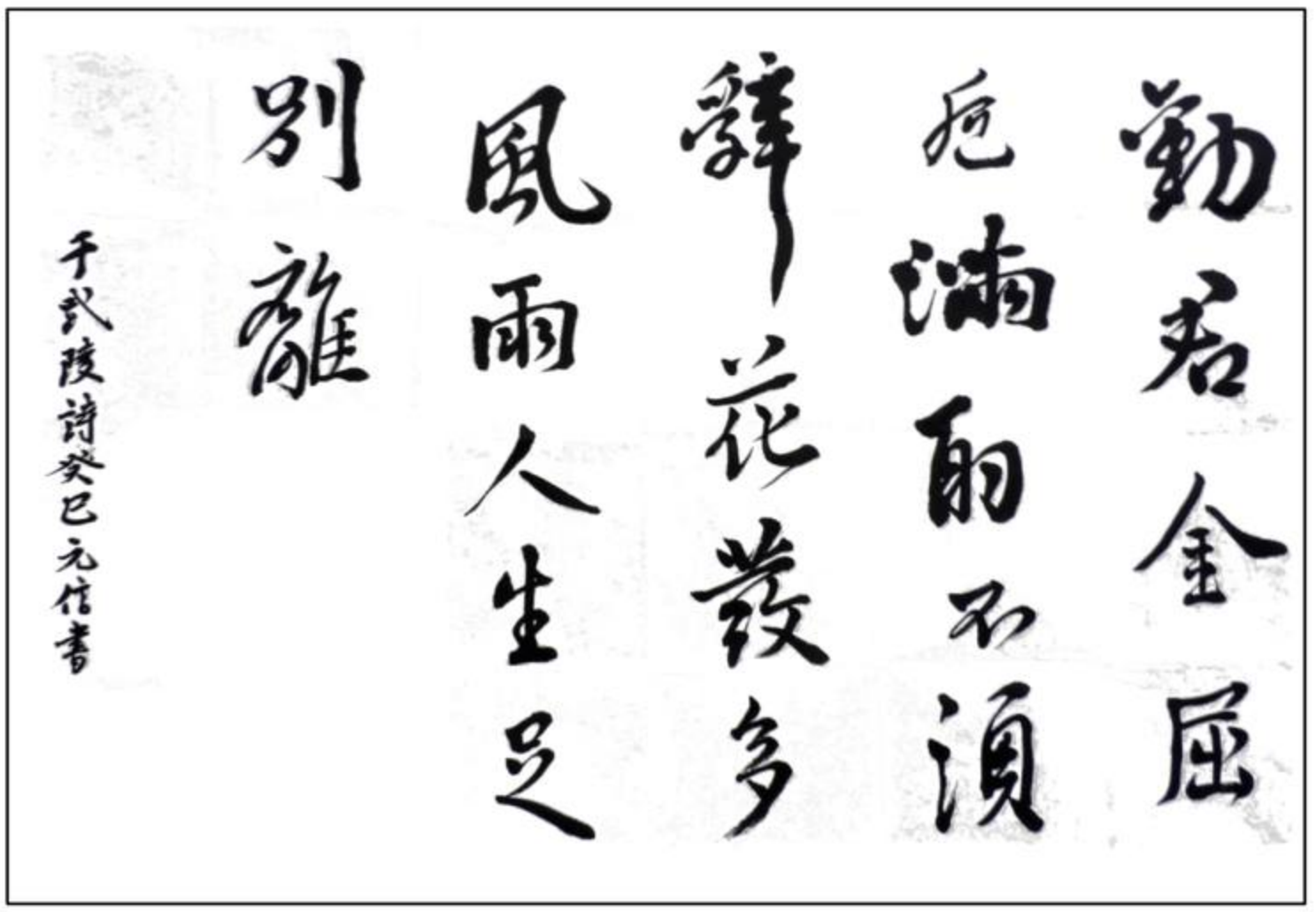


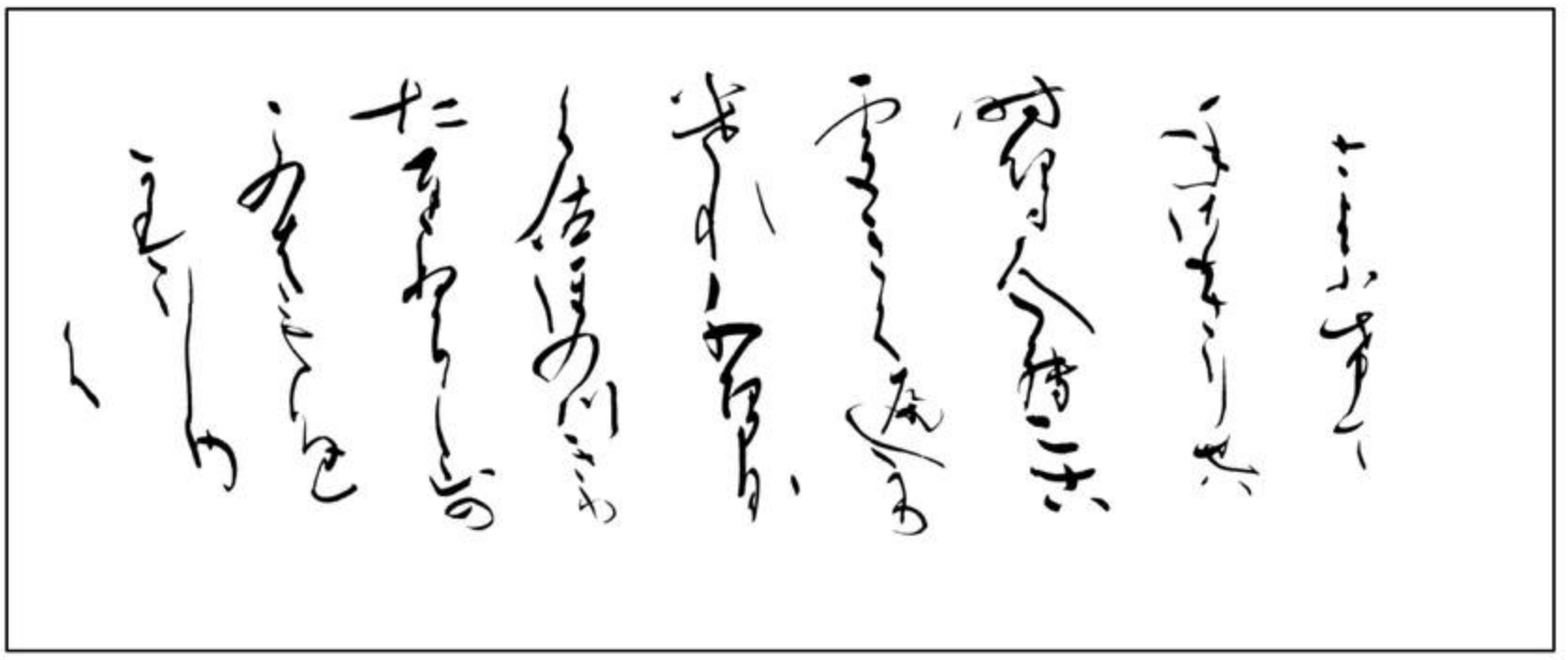
五十九．仁位元信　四回生

創作　行書　「勧酒」　全紙四分の三

「勧君金屈巵滿酌不須辭花發多風雨人生足別離」

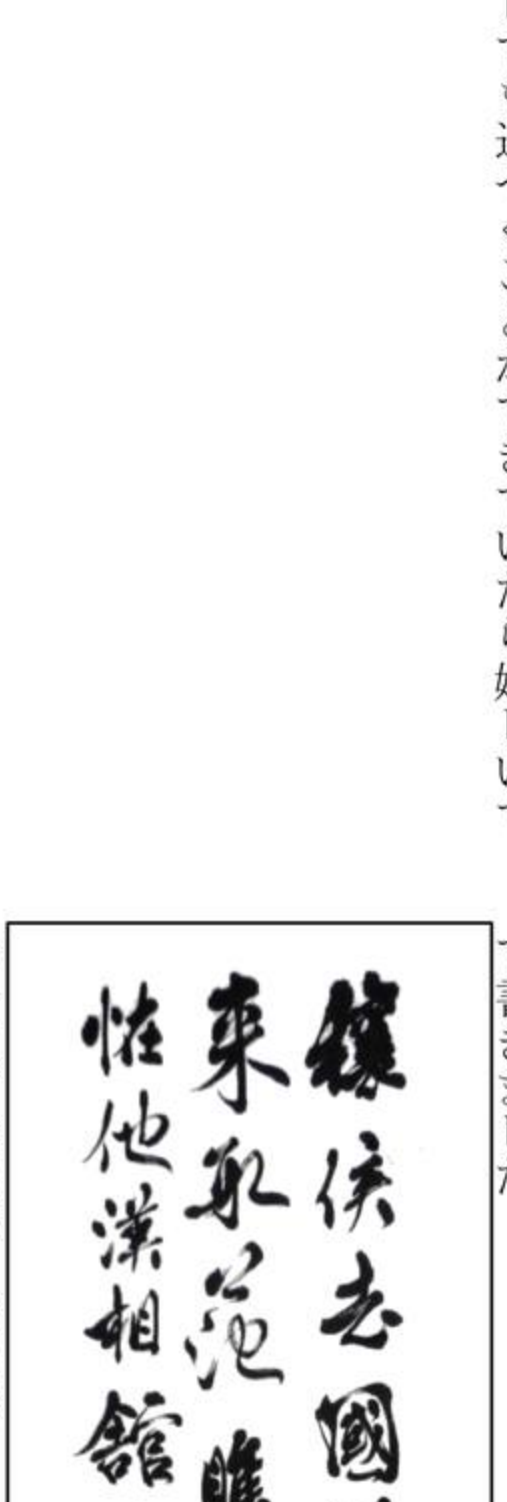
四回生となり最後の作品として好きな漢詩を作品にしました。四年間お世話になった部の仲間たちへの思いも込めて書きました。以下井伏鱒二によるこの詩の意訳です。「この杯を受けてくれ　どうぞなみなみ注がしておくれ　花に嵐のたとえもあるぞ　さよならだけが人生だ」



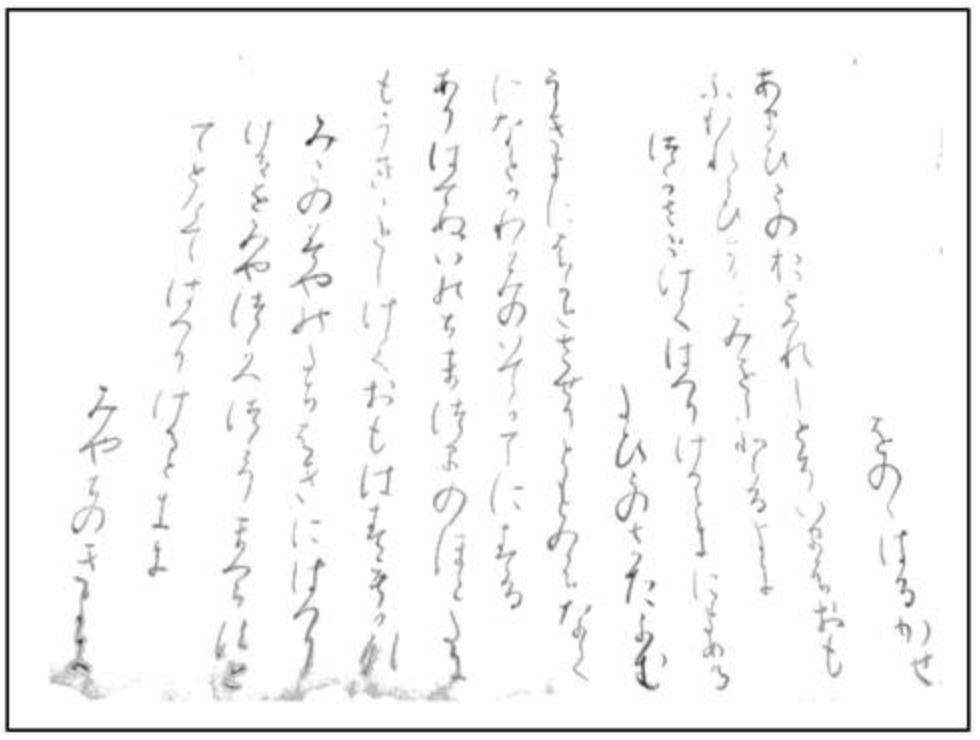


六十．橋詰奈央　三回生
創作　かな　『さ夜更けて：』二尺×六尺
「さ夜更けて 寝覚めざりせば 時鳥 人づてにこそ 聞くべかりけれ〉千鳥鳴く 佐保の川霧 たちぬらし 山の木の葉も 色かはりゆく」
次々と畳み掛けるような行の流れを意識して、練習をしてきました。自分の仮名の理想である、「凛とした線質」に少しでも近づくことができていたら嬉しいです。

六十一．疋田研一郎　一回生
臨書　行書　米芾　『穣侯出關詩帖』　半切
「穣伕去國緩駈車蔡澤還来取范睢悪客只應真可厭恠他漢相舘丘墟」
半切に三行ということで一つ一つの文字が小さくなっても、迫力に欠けるということのないように、それでいて米芾の特徴である上品さを失わないように心掛けて書きました。



六十二．檜山葵　三回生
臨書　かな　伝紀貫之　『高野切第三種』　半懐紙
「をののはるかぜ　あまびこのおとづれじとぞいまはおもふわれかひとかともをたどるよに…」
一年前に書いた高野切に再び挑みました。その美しさに書いていると心も洗われる、思い出深い作品です。成長のほどは果たして…。

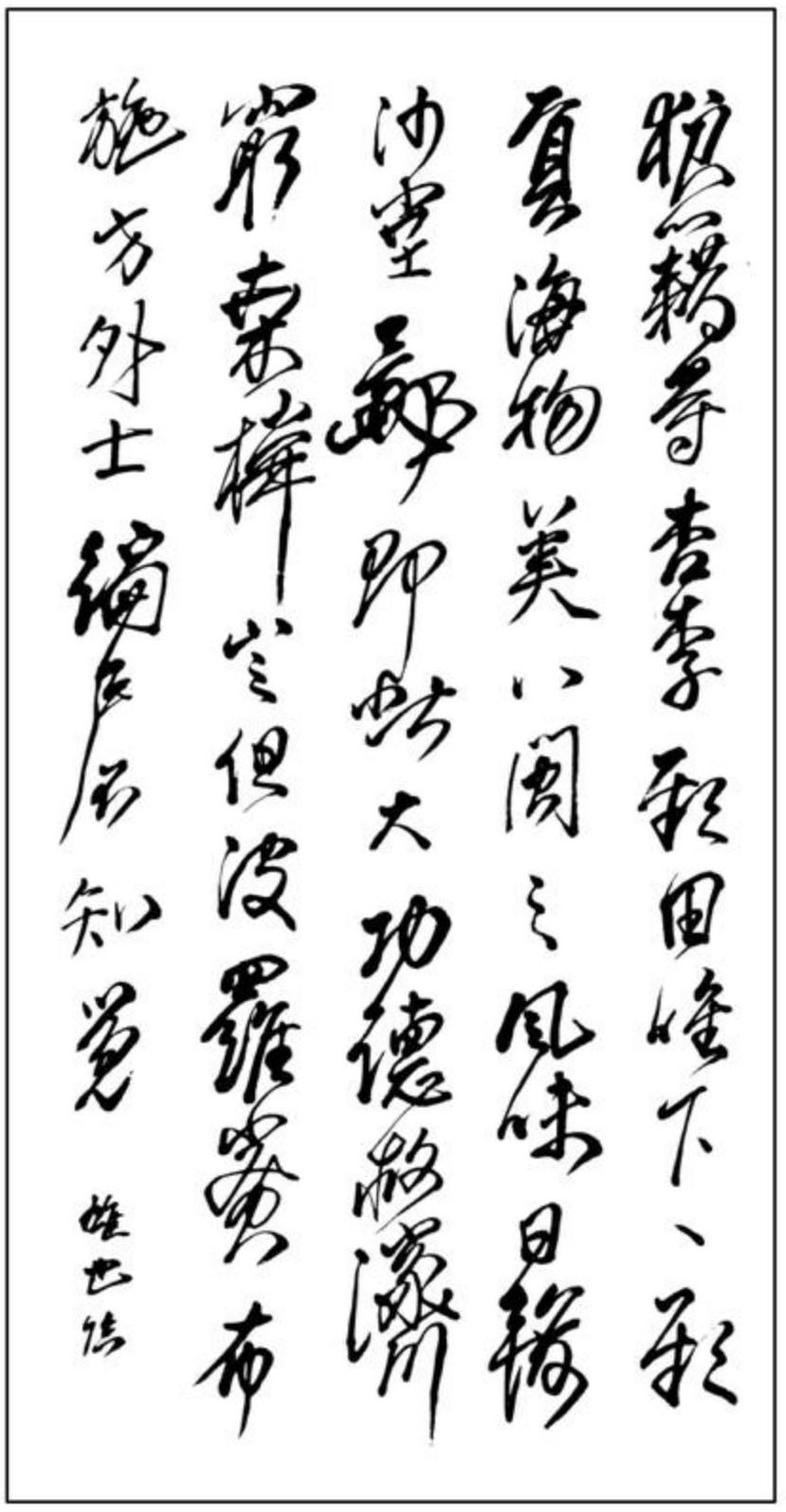


六十三．藤田雄也　二回生

臨書　行草　傅山　『行草五言古詩巻』　全紙

「狼籍等杏李厥田唯下々厥貢海物美八閩之風味日輸沙塞飛鄙即此大功徳救濟棄梓豈但波羅蜜布施方外士編戸不知覺」

行草書体が好きなので、今回もそういう作品を選びました。初めての全紙でスペースの埋め方に苦労し、とりあえず五行で書いてみることにしました。配置や文字の強弱などまだまだなので、本番までにしっかりまとめたいです。



六十四．中野綾香　二回生

臨書　仮名　伝源俊頼　『元永本古今和歌集』　136cm×20cm

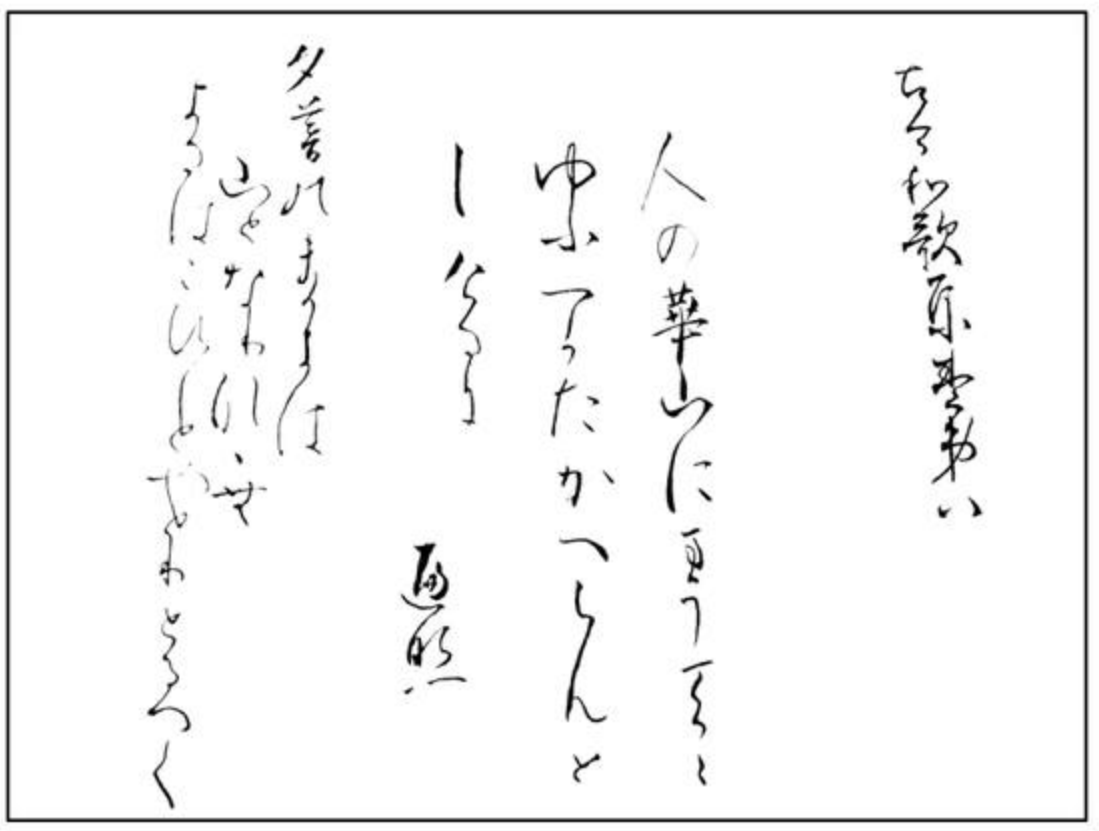
「古今和歌集巻第八

人の華山にまうでゝ　ゆふつかたかへらんとて　しけるに　遍照

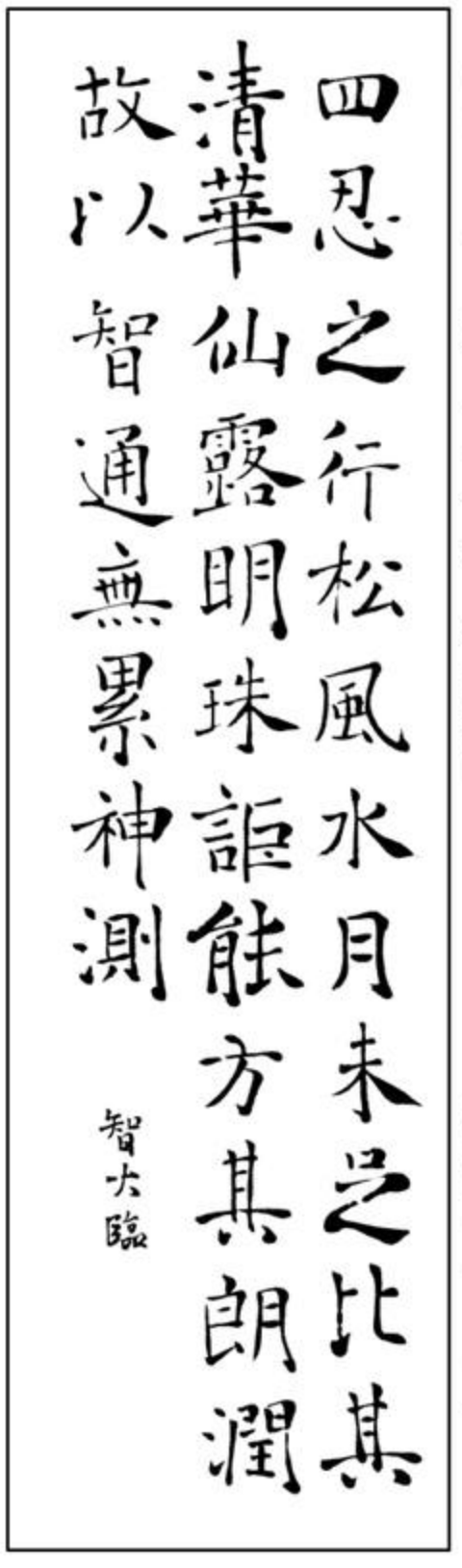
夕暮のまがきは　山となゝむ　よるはこえじとやどりとるべく

中納言兼輔　君が行こしの　白山しらね　鞆雪の間にまに〳〵　あとはたづねむ・・・」

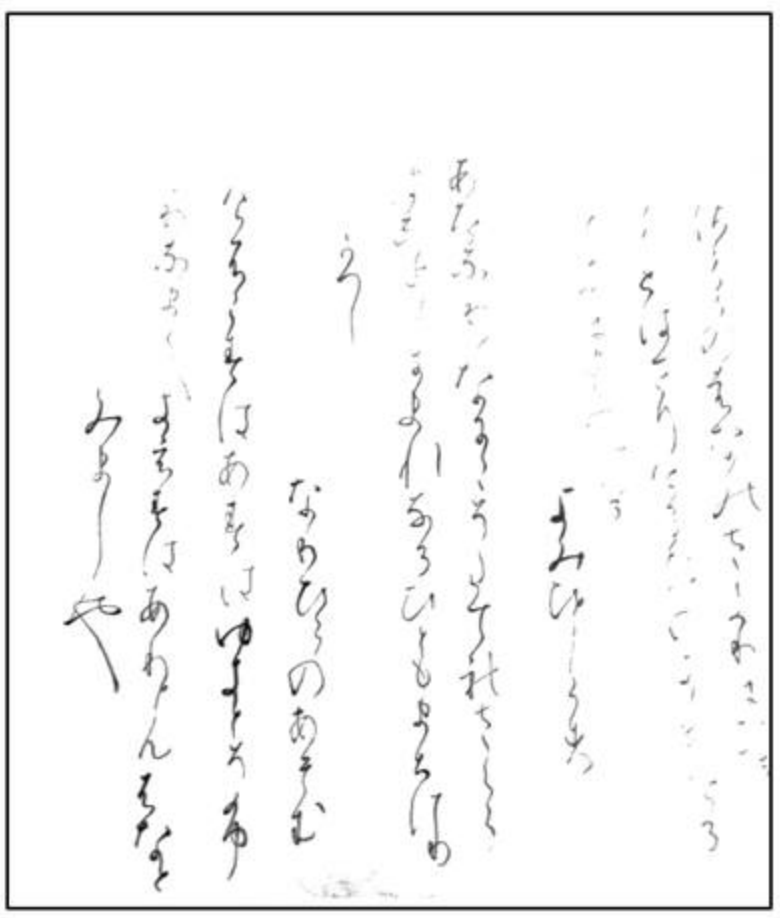
いろいろな表情を持つ、豪華で華麗な書に魅力を感じました。私の感じたそんな魅力を、見る人に少しでも感じてもらえれば、うれしく思います。



六十五．古川智大　一回生
臨書　楷書　褚遂良　『雁塔聖教序』　半切
「四忍之行。松風水月。未足比其清華。仙露明珠。詎能方其朗潤。故以智通無累。神測」
文字がかっこよくて、この雁塔聖教序を臨書することを決めました。臨書というものは、とても難しいですね。御批評のほど、よろしくお願いいたします。



六十六．寶官紗紀　一回生
臨書　仮名　紀貫之　『高野切第一種』　半紙
「佐(さ)くらの者(は)な能(の)さ可利尓(かりに)、ひさしくとはざり介(け)るひとの支多(きた)り介(け)ると支尓(きに)よみける……」
墨の濃淡や線の変化、そして最後の「みましや」が凄く素敵だなと思い、臨書することにしました。仮名は初挑戦だったので、分からないことだらけで苦労しましたが、雰囲気が出せていれば良いなと思います。
後批評のほどよろしくお願いします。



六十七．松澤祐実　二回生
臨書　行書　文徴明　『行書詩巻』　半切
「春歸聊與客登臺。芳墳誰識眞娘墓。」
約六年ぶりに筆を持ち、初めて半紙より大きな作品に挑戦しました。文徴明のかっこよさ、特に「春」という字にひかれて書くことにしました。文徴明の特徴が少しでも表現できていたら嬉しいです。



六十八．松下有菜　一回生
臨書　行書　王羲之　『蘭亭叙』　半切
「有峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帯」
王羲之の蘭亭叙を臨書しましたが、練習不足で納得のいくものに仕上げることができませんでした。これからたくさん練習して上手になりたいです。

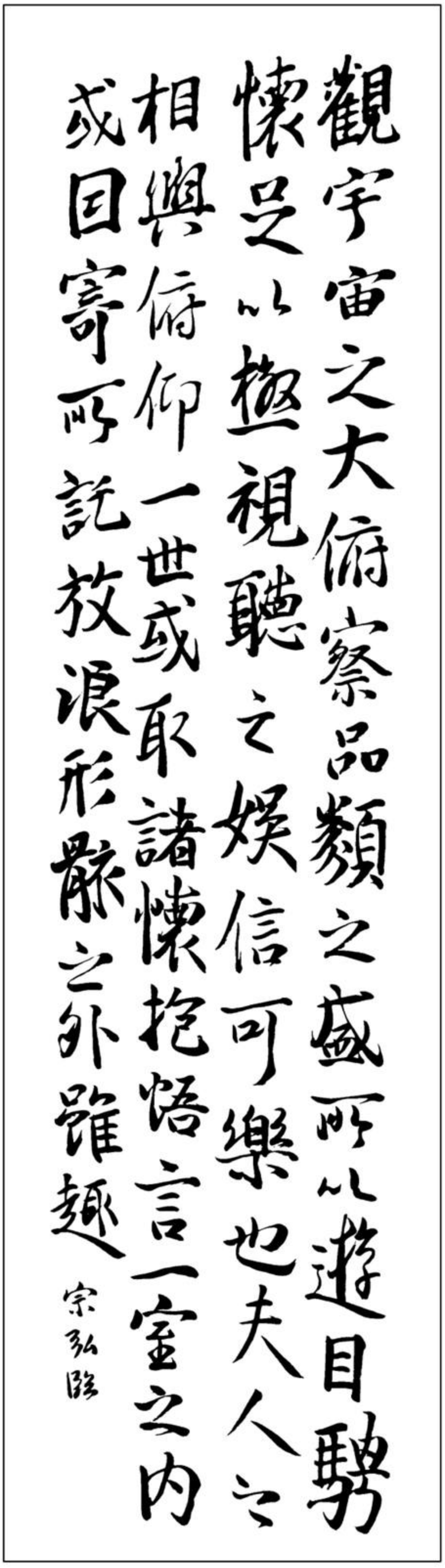


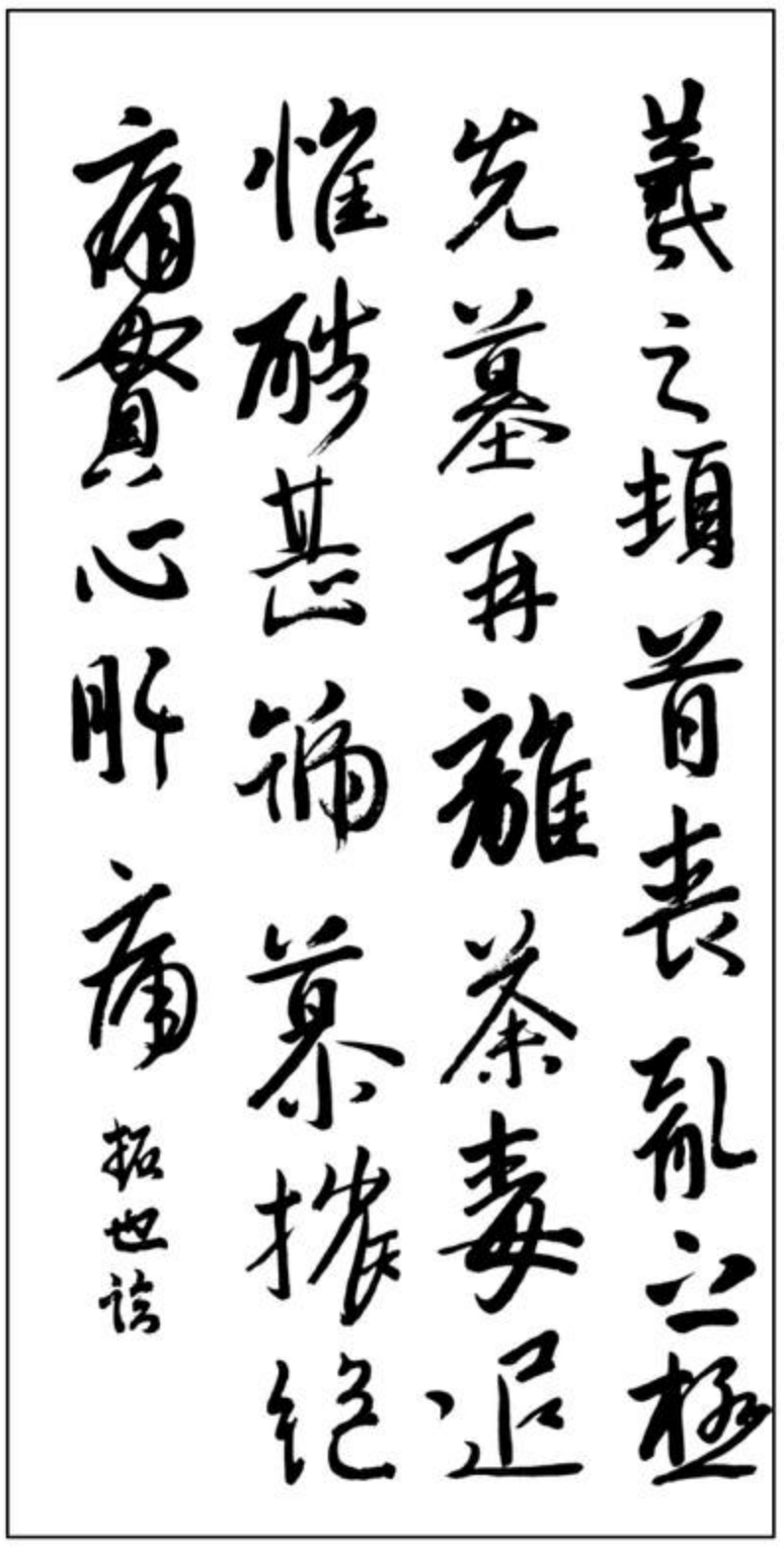
六十九・福田宗弘　修士二回生

臨書　行書　王羲之　『蘭亭叙』二尺×八尺

「觀宇宙之大。俯察品類之盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之娯。信可樂也。夫人之相與俯仰一世。或取諸懷抱。悟言一室之内。或因寄所託。放浪形骸之外。雖趣舎萬殊。靜躁不同。」

蘭亭序に特徴的な字の入りの鋭さを出せるように意識しました。二尺八尺で書いたのは初めてでしたが、字のバランスが後半になっても崩れないよう気を付けました。





七十．宮下拓也　二回生

臨書　行書　王羲之　『喪乱帖』　全紙

「羲之頓首喪乱之極先墓再離荼毒追惟酷甚号慕摧絶痛貫心肝痛」

前回よりも線に動きのあるものに挑戦しましたが形をとらえるので精一杯でした。でも、「書く」ということに少しは近づけたのではないかと思います。



七十一．村田真名美　四回生

臨書　行書　黄庭堅　『松風閣』　半切

「臺籀壽可怡亭看篆蛟龍纏安得此身」

散々迷いましたが、最後はやはり黄庭堅が書きたいと思いました。練習時間が思っていたより取れず未熟なところが多いと思いますが、黄庭堅のかっこよさが伝われば嬉しいです。

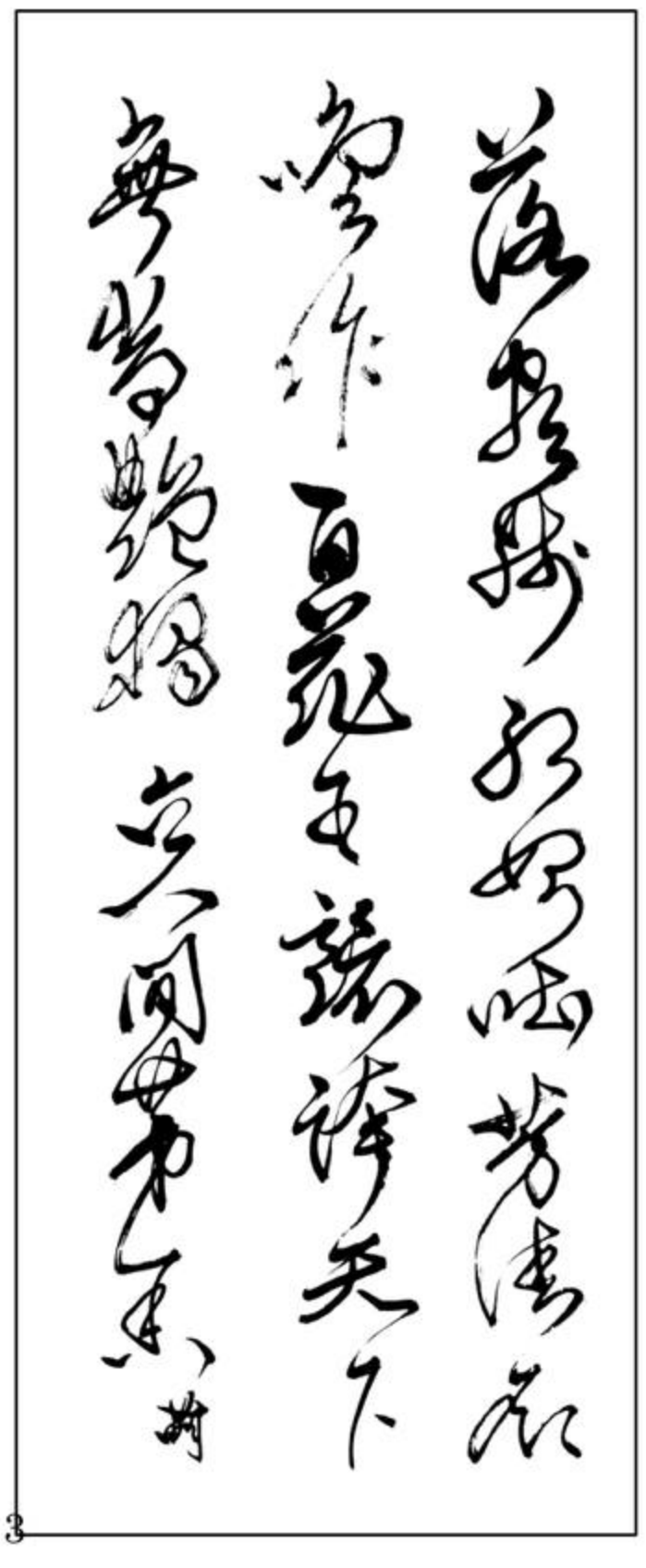


七十二．家倉凌　二回生

臨書　行書　董其昌　『軽陰閣小雨詩』　半切

「深院書慵開座看青苔色欲上人」

気品溢れる字形と線質に憧れて。この作品を臨書するにあたって、董其昌の他の法帖もいくつか書いてみましたが、本当に自由自在、変幻自在という感じで、筆を手足のように使っていらっしゃったのだろうとひしひし感じました。深、青、色、人は特に気に入っているので見ていただきたいです。



七十三．山口萌　四回生

創作　草書　『牡丹』　連落

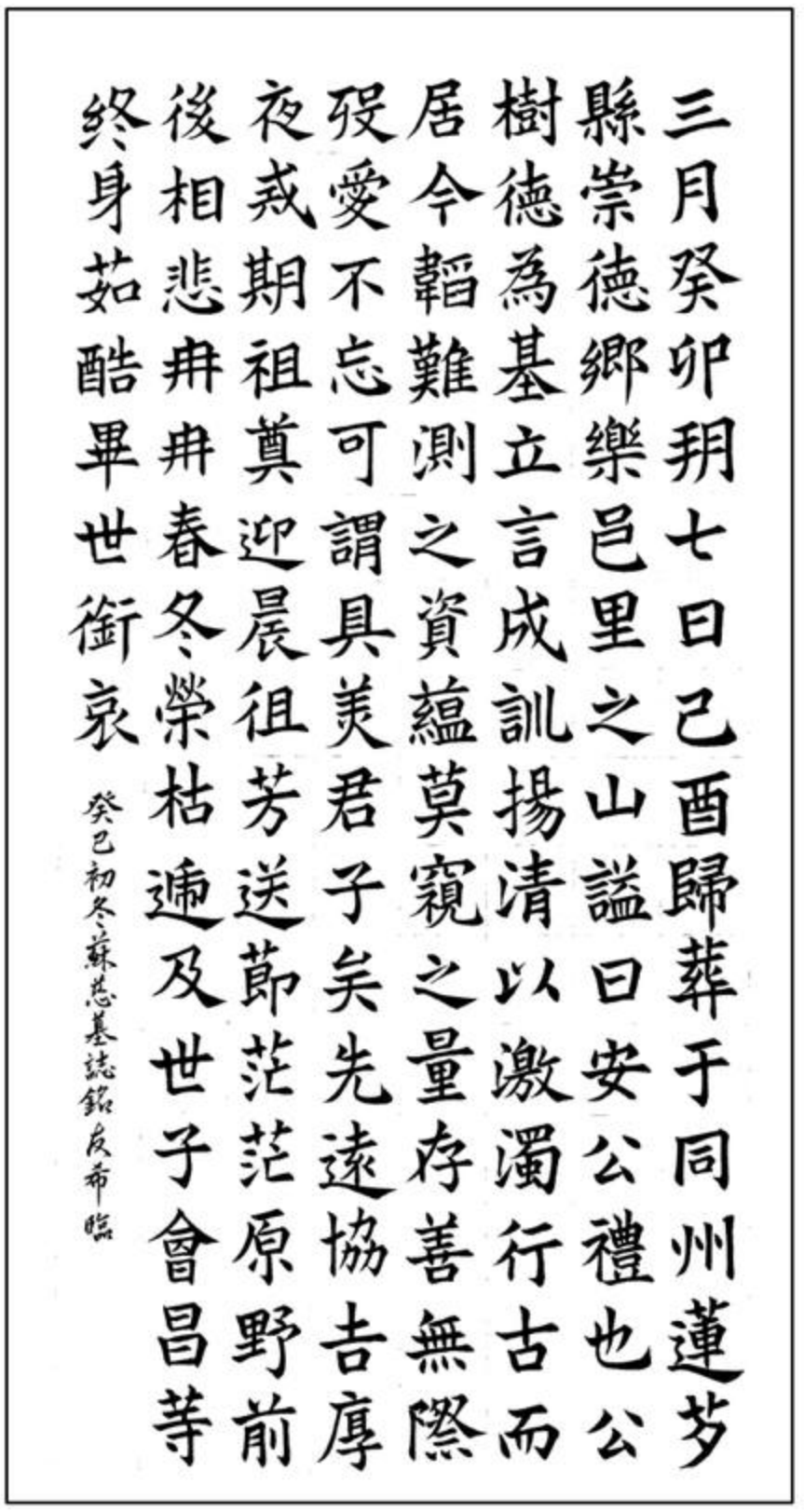
「落尽残紅始吐芳／佳名喚作百花王／競誇天下無双艶／独占人間第一香」

ネタ探しというわけではないですが、息抜きに漢詩を眺めることがごくたまにあります。この漢詩を見つけたとき、この作者さんはどんな素晴らしい牡丹を見たのかとうらやましくなりました。この詩のなかの牡丹のように鮮やかに生きていきたいものです。

七十四．山本大翔　三回生
創作　行書　『冬季』　半切
「寛裁襪厚絮衣歳熟鴉聲樂天寒雁影稀」
本から冬の文章をいくつか探して書きました。作品を見た人が立ち止まってくださるような、余白美が表現できるようになりたいものです。



七十五．吉村友希　一回生
臨書　楷書　『蘇慈墓誌銘』　全紙
「三月癸卯朔七日己酉歸葬于同州連芧…」
整った、かたい楷書に魅力を感じて挑戦しました。初めての墓誌銘で、たくさんの方にアドバイスをいただきました。真っ白だった紙がだんだん作品になっていくのが嬉しくて、夢中で書きました。



七十六．山脇謙　一回生
倣書　行草　莫是龍　『山居雑賦巻』　半切
「紅亭結水上。四面開芙蕖。群籟落巖際。坐令清聽虚。」
変化に富んだ作品を書こうと思ったが，ややおとなしい印象になってしまったかもしれない。構成や流れなどこの作品で学んだことをこれからの作品作りに活かしていきたい。



七十七. 山崎絢香　一回生

臨書　篆書　鄧石如　『篆書白氏草堂記六屏』　二尺×六尺

「南抵石澗。夾堰有古松老杉。大僅十人囲。高不知幾百尺。脩柯戞雲。低枝拂潭。如種樹。如蓋張。如骼蛇走。松下多灌叢蘿蔦。不到地。北據層厳。積石嵌空。奇木異艸。蓋覆其上。緑陰蒙々。朱実離々。不知其名。四時壹色。」

前回の書展で行書を書き玉砕した直後、全く違うものを書きたいと思い、初めて篆書に挑戦しました。独特な筆使いに慣れること、バランスをとること、線の太さを統一することなどに苦労しました。何とか雰囲気が出せていればいいなと思います。拙い作品ですが、ご批評よろしくお願いします。

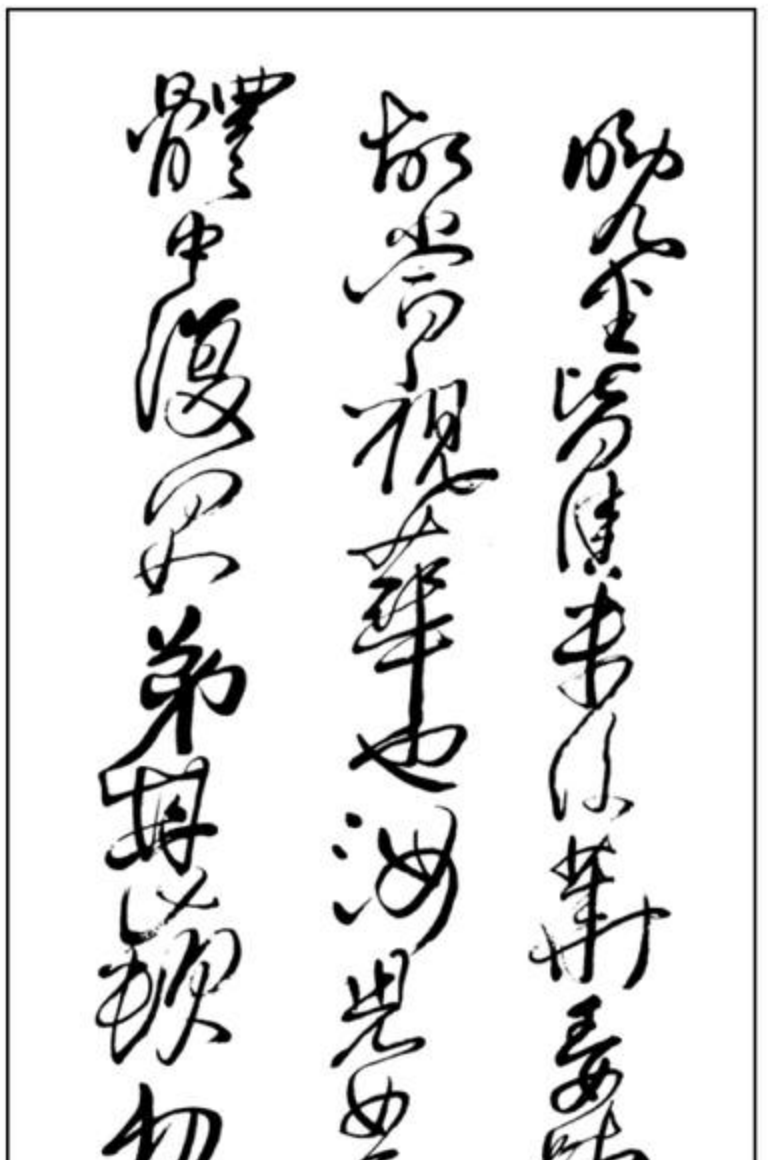


七十八．山下燎亮　一回生

臨書　草書　王鐸『臨王獻之發吳興二十九日帖幅』　715mm×2380mm

「晩生皆佳未復華姜疏比夾得疏故惡故當視華也兜女可不昨遂不奉恨深禮中復何如弟甚頓勿々不具」

調子乗って、軸作品二つ目にして二八サイズ以上のサイズの作品に挑戦しちゃいました。前回書いた草書と違って王鐸の作品は文字間が繋がっているので、その連綿を上手く表現するのに特に苦労しました。何よりも文字の大小や白の部分とのバランスなど王鐸っぽく書こうと心がけたつもりです。　拙作ですが、よければご鑑賞お願いします。



七十九．渡辺健介　三回生

創作　篆書　『五言対聯』二尺×六尺

「瑞氣靄然樓　紫煙凝鳳闕」

金文の独特の造形を活かしながら、線に変化をつけて楽しもうとしましたが、作品全体の雰囲気、文字の配置・バランスとの両立が難しく悩みました。やはり書道は奥深いものだとを改めて実感します。



八十．吉田梨沙　三回生

創作　かな　『月と星』　二尺×六尺

「と万(ま)るへきや登(と)を八(は)月二(に)あく可(か)れて阿(あ)すの三(み)
千(ち)遊(ゆ)くよ者(は)能(の)旅人〳つ支(き)乎(を)こそ那(な)可(か)免(め)難
(な)れ志(し)可(か)本(ほ)し能(の)よの婦(ふ)可(か)支(き)あ八(は)連(れ)乎
(を)こよ日(ひ)し利(り)ぬ流(る)」

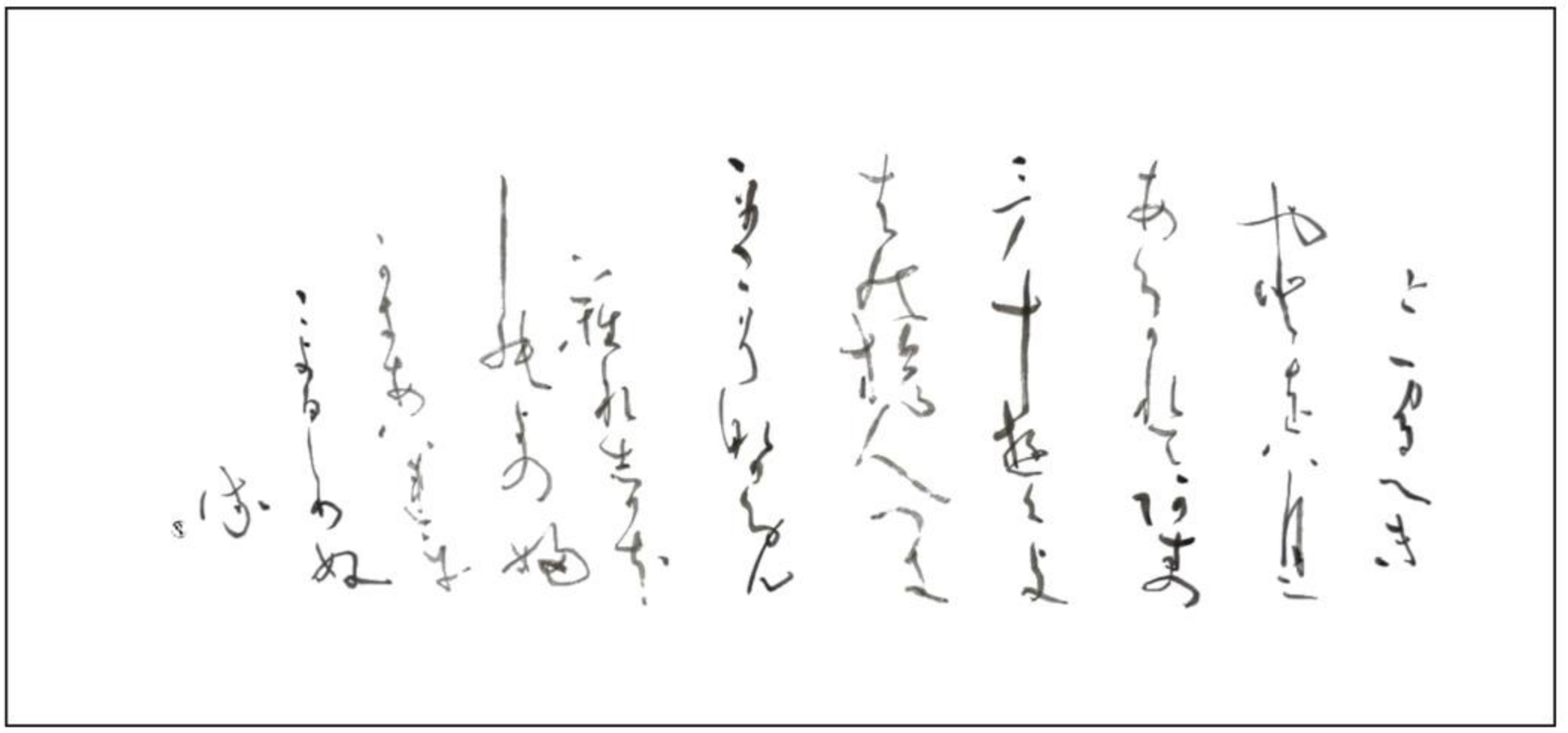
とまるべき宿をば月にあくがれて明日の道ゆく夜半の旅人

京極為兼

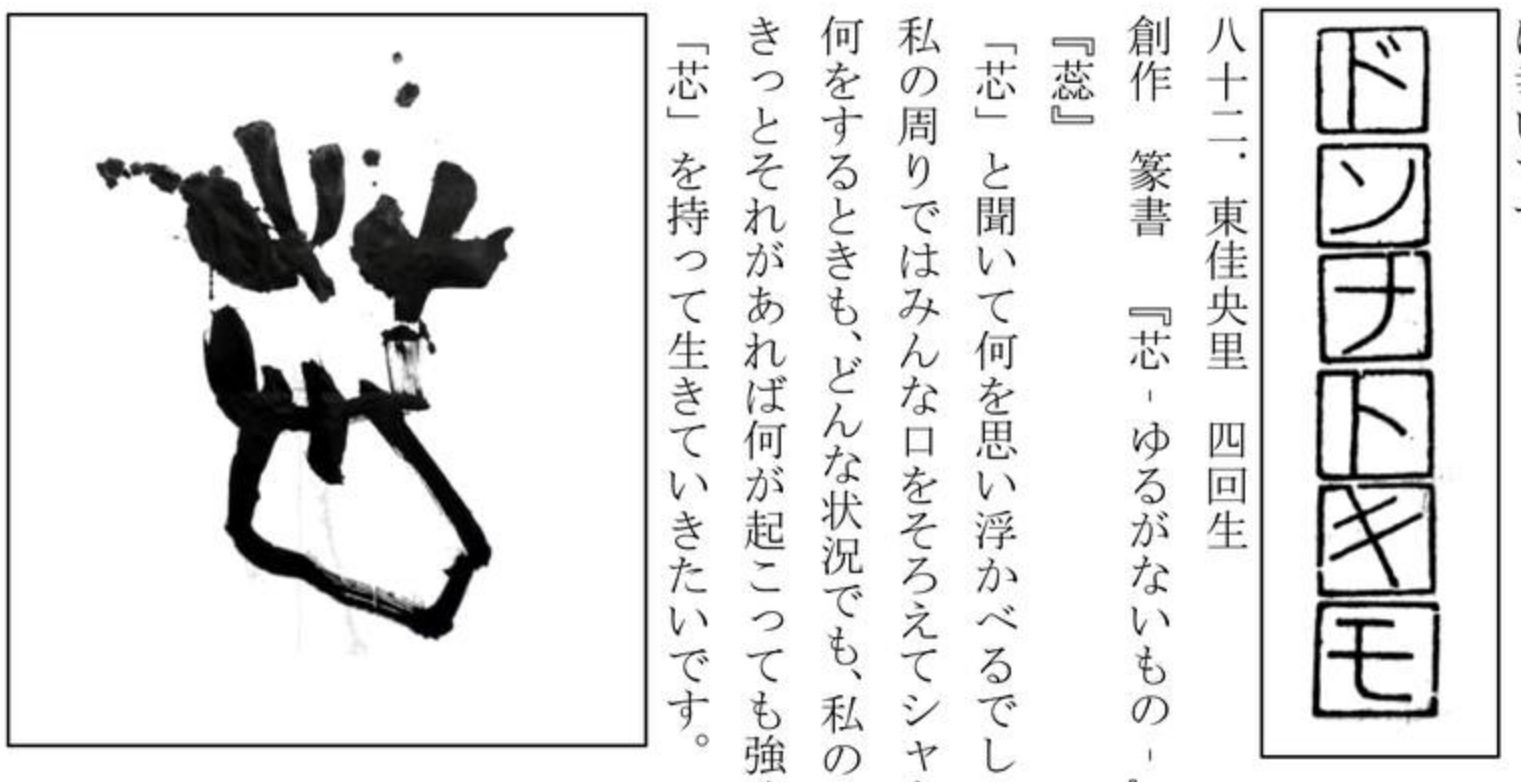
月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれをこよひ知りぬる

建礼門院右京大夫

帰り道に夜空を眺めるのが日課となっている。星月を見上げた時の気持ちを、作品を通して伝えられたらと思う。

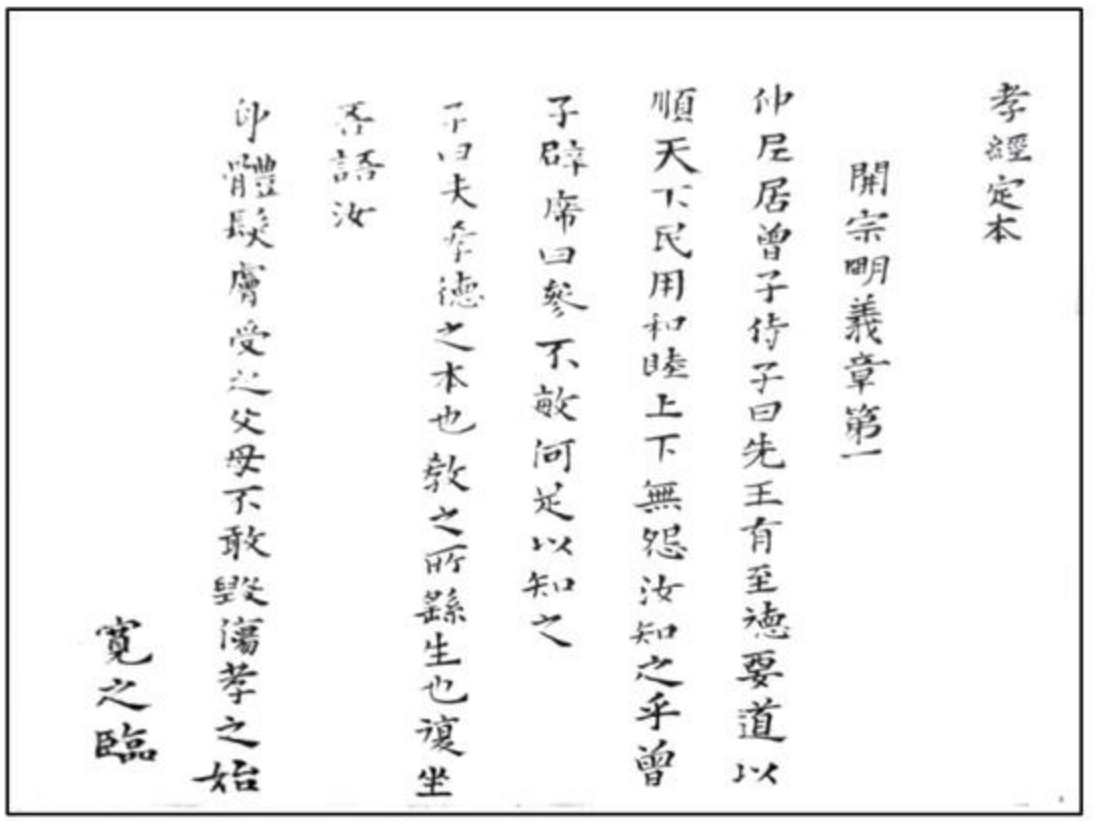


八十一．東佳央里　四回生
創作　篆刻　『槇原敬之「どんなときも。」より』　色紙サイズ
「ドンナトキモ　ドンナトキモ　マヨイ　サガシツヅケル　ヒビガ　コタエニ　ナル　コト　ボクハ　シッテル　カラ」
槇原敬之さんの歌は、背中が伸びるような、自然と笑顔になるような、やる気や元気をくれますね。まっすぐな歌詞が大好きです。そんな素敵な歌詞をカタカナ篆刻で、真っ直ぐに、力強く表現したいという想いで、この作品に取り組みました。写真では表現できないカタカナ篆刻の魅力を、実際に見て感じていただければ幸いです。


ドンナトキモ

八十二．東佳央里　四回生
創作　篆書　『芯‐ゆるがないもの‐』　45cm×53cm
『蕊』
「芯」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？
私の周りではみんな口をそろえてシャーペンの芯と言っていましたが…(笑)
何をするときも、どんな状況でも、私の中で常に存在し、決して揺るがないもの。きっとそれがあれば何が起こっても強く立ち向かえる、そう思えるもの。そんな「芯」を持って生きていきたいです。

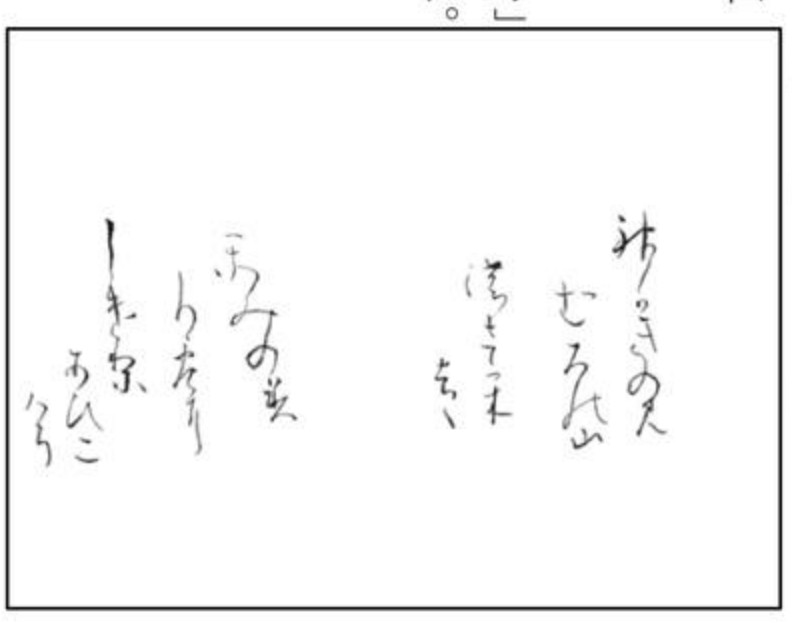
八十三．植島寛之　四回生
臨書　楷書　黄道周『孝経冊』　小作品
細字に挑戦しました。
墨量と筆使いに苦戦しましたが、なんとか一つの作品として完全させました。柔らかい雰囲気を楽しんでもらえればと思います。


孝經定本
開宗明義章第一
仲尼居曾子侍子曰先王有至德要道以順天下民用和睦上下無怨汝知之乎曾子辟席曰參不敏何足以知之
子曰夫孝德之本也教之所由生也復坐吾語汝
身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始
寬之臨

八十四．川上澄香　三回生
模刻　『芳馨を折りて思う所に遺る(楚辞　九歌　第2　山鬼より)』　色紙の半分
前回の初夏書展を見に来られていたお客様から、篆刻をやってみたら、とのお言葉を頂き、初めて模刻をしました。ガリガリ彫るのが楽しくて、そうだ側款でも面白いことしよう、と思ってガリガリ彫っていたら、側款の方が目立ってしまいました。因みにこの詩は、周りは竹藪なので云々と続きます。



八十五．柴田尚紀　二回生
臨書　かな　小野道風　『継色紙』



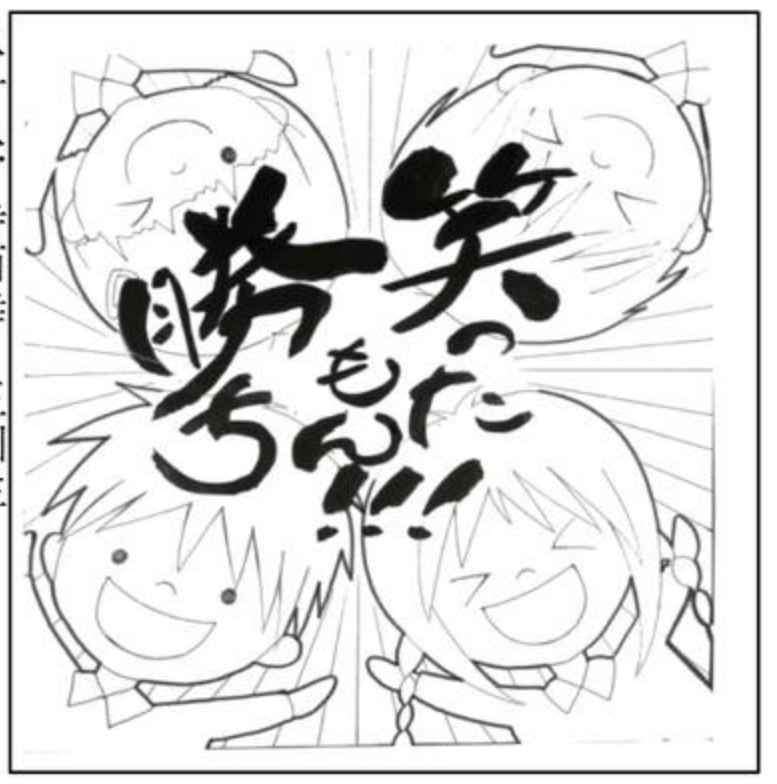
「神がきのみ　むろの山
のさかき　ばは
かみのみ　むろに
しげり　あひに　けり…」
かなって、きれいですね。

八十六．鈴木遼　四回生
創作　篆書　『百折不撓』　サイズ：3×3cm（印）



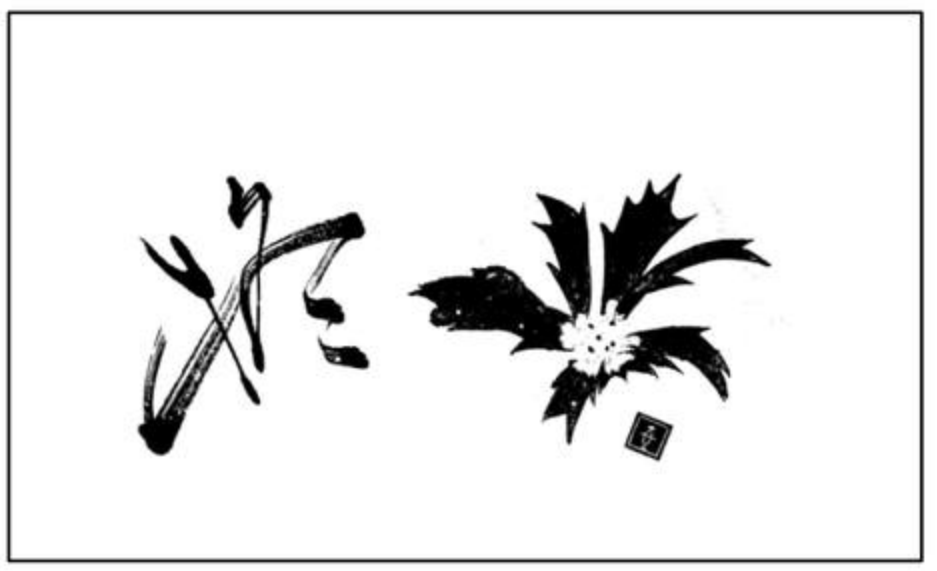
折れない心が欲しいです。
この言葉を社会人となった
来年の自分に送ります。

八十七．多門千早　三回生
創作　調和体　『笑ったもん勝ち』　色紙



人生とにかく笑ったもん勝ちだと思います。

八十八．寺西幸　三回生
創作　『ひいらぎつばき』　扇子



「柊」「椿」
今とこれからのふたつの季節をつないでくれそうな、ふたつの木を選びました。

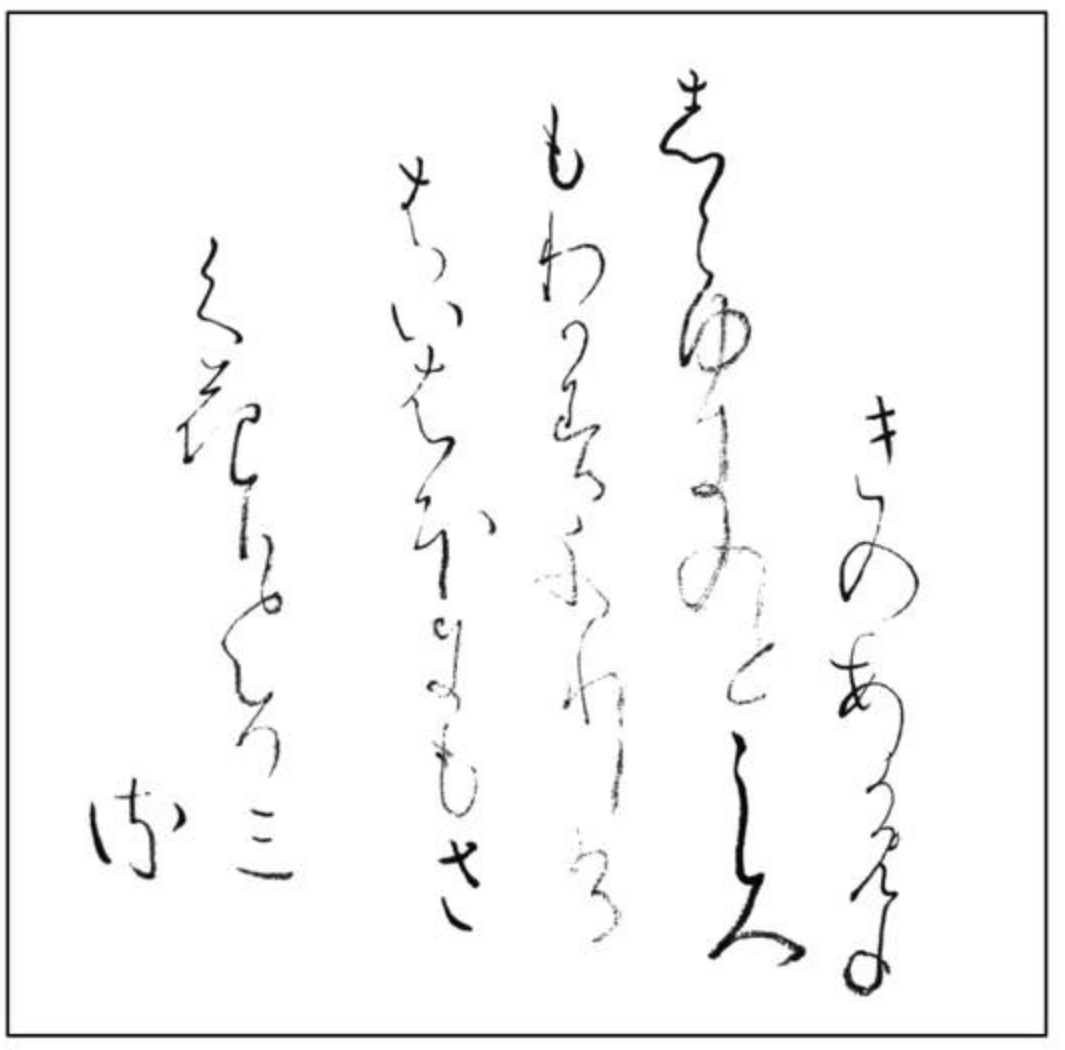
八十九．東村智佳　二回生
創作　篆書　『春夜』　色紙
「春宵一刻値千金」
篆刻をやってみたい、と思って彫った自己満足作品です。今後模刻にも挑戦してきちんと勉強していこうと思います。



九十．藤井結稀　三回生
創作　篆刻　『風細飛花相逐、林深啼鳥時移』　色紙
「風細飛花相逐、林深啼鳥時移」初めて篆刻作品に挑戦しました。朱白の印の雰囲気の違いを見ていただければなと思います。落款もまだまだですが私なりにこだわりました。
ご批評宜しくお願い致します。



九十一．古川智大　一回生
臨書　仮名　紀貫之　『寸松庵色紙』　色紙、
「きのあ支（き）見（み）年（ね）　志（し）らゆ支（き）のところ　もわ可（か）春（ず）ふ利（り）し介（け）　者（ば）い者（は）本（ほ）尓（に）もさ　く花可（か）と曽（ぞ）三（み）　流（る）」
初めて仮名を臨書しました。線の柔らかさと空間を出すのに苦労しました。もっと精進します。



九十二．　山本大翔　三回生

創作　調和体　『群青日和』　色紙

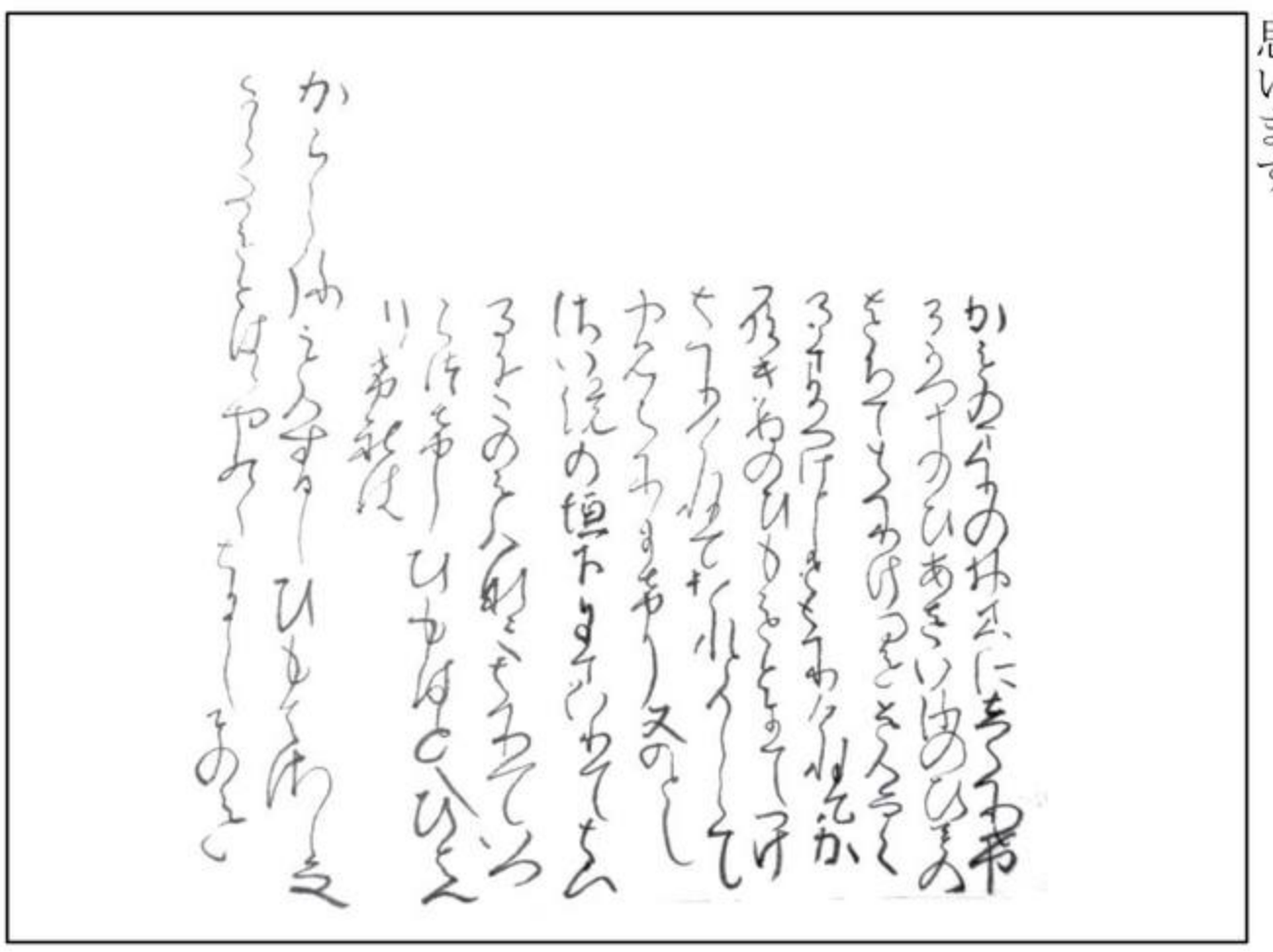


「群青日和　新宿は豪雨あなた何処へやら…」

いつもmiwaの曲を書いてたのですが、東京事変に浮気してみました。閃光少女やキラーチューンとかもあったのですが、なんとなく群青日和に。「背景群青色じゃねーじゃん！」みたいなことは言わないでください（笑）。

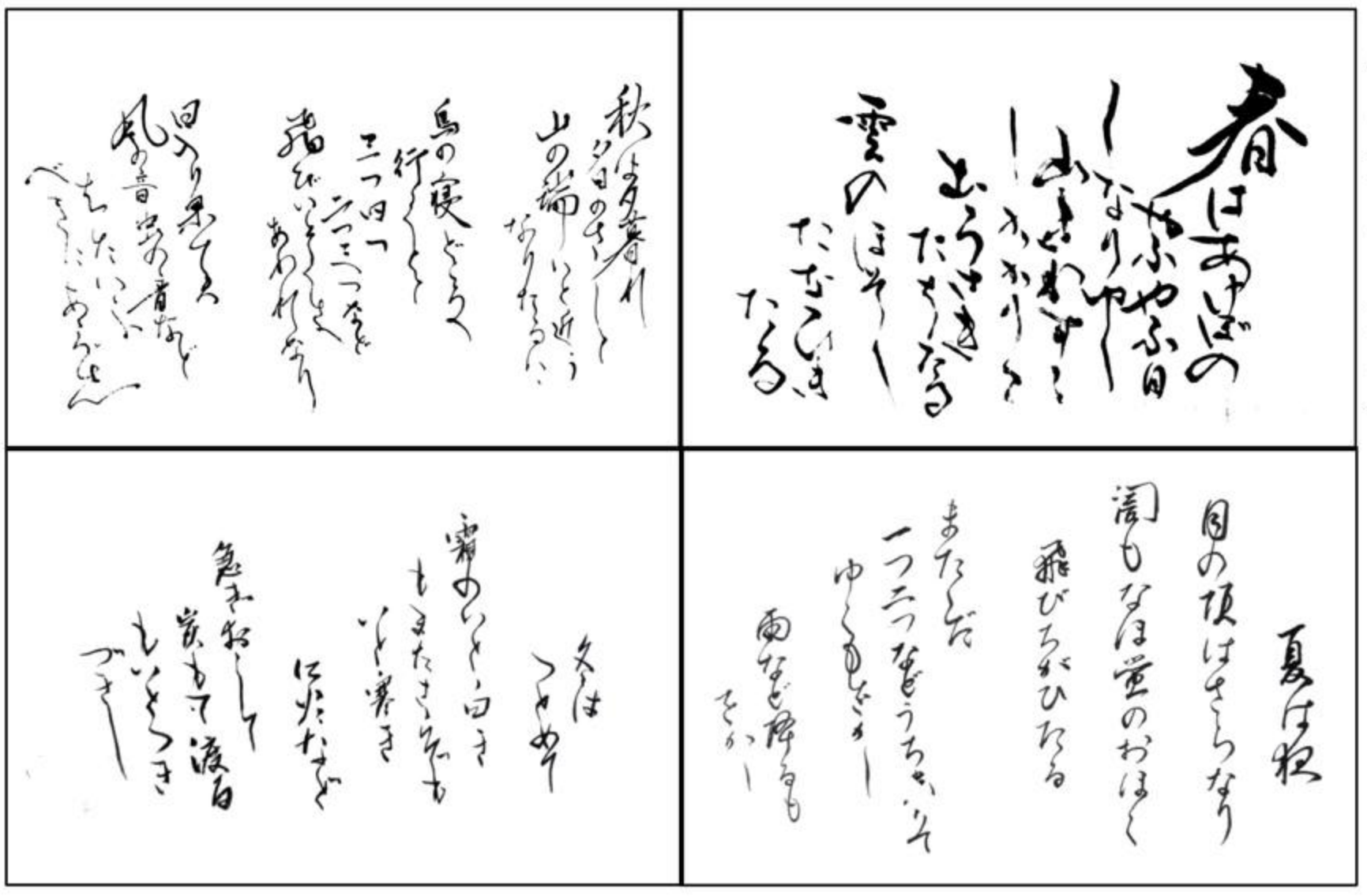
九十三．　脇本啓太　四回生

臨書　かな　伝小大君　『香紙切』　色紙



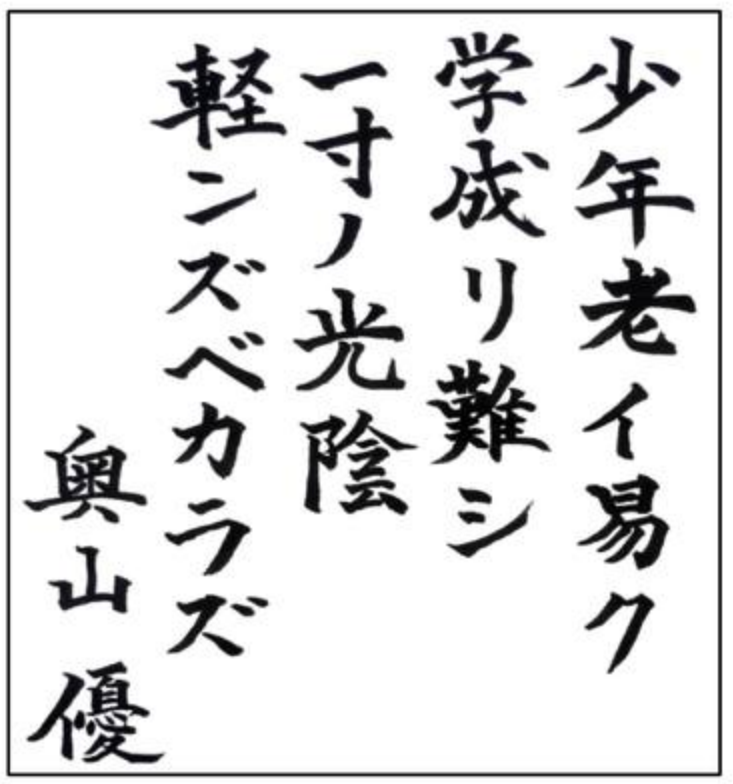
「か毛の万つ利のお万へに志者へ利希/る可へさのひあをい路のひ毛の/をちて者へ利けるををん奈久/る万尓つけさ世者へ利介れ盤か/羅きぬのひもをと支てつけ/者へ利介れ盤たれと无しらて/や見者へ利尓希り又のとし/佐い院の垣下尓万い利て者へ/る尓このをん那三者へ利ていつ/ら徒希しひもはとゝひ者へ/り希礼は/からこ路毛无す日しひも者佐し奈/可ら多毛とはゝや九ゝち尓し毛のを」

法帖から伝わってくるものをこの手でできるだけ再現できるように書きたいと思います。



九十四．山口萌・平野泰隆・水谷慈・鈴木新人
創作　調和体　『枕草子を綴る～華麗なる書き手たち～』　全紙
「春はあけぼの……」。
「合作しませんか？」誘われるまま、始めた合作。適切な食事と適度なお酒によって養われ、ルンルン気分で書くことができた。それぞれの文字に対応する四季を感じて頂けたら幸いです。

九十五．四回生　大庭諒介・鈴木新人・奥山優
創作　調和体・写真　『落款神話体系』　781mm×1051mm
『諒』　『鈴木新人』　『少年若クシテ…　奥山優』
自分たちの過去から派生した八人の平行世界を想定し、その人物になりきって落款（サイン）を考えてみました。ある弱小剣道少年が竹刀を指揮棒に持ち替えることで開花した音楽家R.O、老後の不安から若くして日本の将来を背負う覚悟をした政治家A.S、著書「マックスハイテンション」により大成した新進気鋭の小説家Y.O、etc…　僕たちのパラレルワールドをお楽しみください。







九十六．二回生　北堀雄大（楷書）　石博昭（草書）　小島健史（篆書）　稲葉由花利（隷書）

臨書　楷書・草書・篆書・隷書　鄧石如『正草篆隷墨寶册』　半切横四連

清代の書家である鄧石如が四つの書体で別の詩を書き、それらをまとめ一つの作品を作りあげました。私たちは四人が各書体を担当することで四人の個性を生かしつつ、一つの作品をまとめ上げることに挑戦しました。四書体の独立性と同時に、それらが協調している様を観て頂けたら嬉しいです。

九十七．修士一回生　永溝聡士・三回生　小松聡子

創作　篆刻　『篆刻合作』　半切横二連

「（永溝）秦王深居不得近　從破衡成欲誰信　白頭游客困咸陽　憔悴黄金百斤盡
海中僊人黄鵠擧　大笑人間爭腐鼠　丈夫何意作蘇秦　六印才堪警兒女　古来多
爲虚名老　不見阿房淨如掃　千年虎豹守天門　一日牛羊臥秋草
（小松）人生無根蔕　飄如陌上塵　分散逐風轉　此已非常身　落地爲兄弟　何
必骨肉親　得歡當作樂　斗酒聚比鄰　盛年不重來　一日難再晨　及時當勉勵
歳月不待人」
篆刻が、好きです。
（写真掲載なし）

九十八．修士二回生　木谷亮太・修士一回生　永溝聡士

創作　調和体ほか　サイズ半紙横　横二×縦三枚

『オリジナルハリケーン～kid, I like quartet より』

UNIZON SQUARE GARDEN の歌です。

「颶」はハリケーンを指す漢字で、同曲中の「オリジナルハリケーン」というフレーズを粗っぽく表現しました。

書道部での思い出に懐かしさと感謝をこめて。

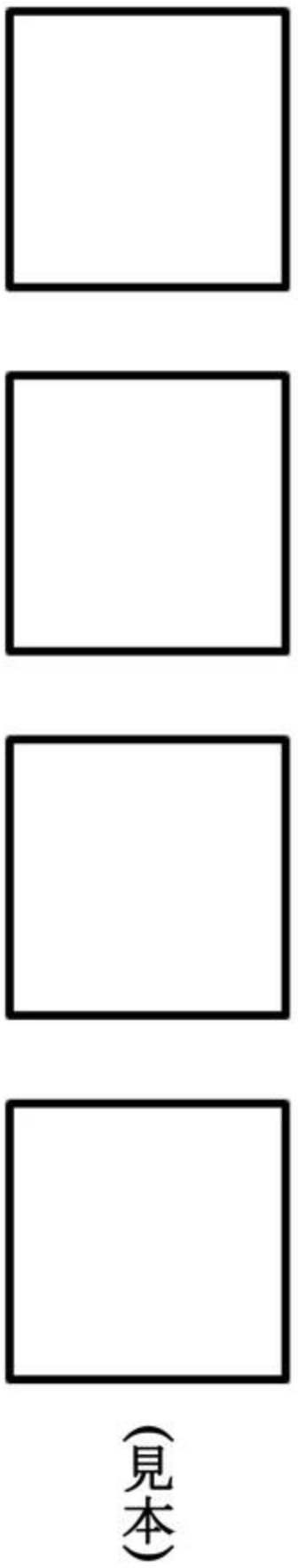


九十九．四回生合作　「四回生×人生ゲーム」
卒業合作です。これまで何度も回生合作をしてきましたが、最後の合作というこ
とで、みんなで楽しく取り組め、これまでの書道部生活を振り返るものにしたい
という思いで、私達の四年間を人生ゲームにしました。この仲間たちと楽しいこ
とも大変なことも共に経験してきた日々は、この先の人生でも大切な宝物です
（写真掲載なし）

百．全体合作　『サンタさんからの贈り物』
今年はクリスマスの時期ということで、部員それぞれの、サンタさんから欲しい
ものをモミの木のオーナメントとして飾りました。是非一つ一つご覧になってく
ださい。
（写真掲載なし）

お客様参加企画　～文字さがし～

今回、冬樟展の会場内の四か所に、一文字ずつ、合計四文字が隠されています。
四文字を探し出し、並び替え、言葉をつくり、別紙記載の枠にご記入の上、受付
までお持ち下さい。見事正解された方には、もれなく、部員からのささやかなプ
レゼントがございます。


（見本）

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

Calligraphic Item Specialty Store 書遊 検索
複刻用品・書道用品・額・軸装はお任せください。
書遊
http://www.syoyu-e.com/
AM.10:00－PM.6:00

奈良本店 駐車場完備
奈良市今辻子町37
TEL0742-23-5547
FAX0742-20-2261

大阪店 駐車場あり
大阪市福島区福島 5-14-6クレセントビル2F
TEL06-6458-8808
FAX06-6456-4077

京都店 駐車場あり
下京区烏丸通五条下ル大坂町 第10長谷ビル3F
TEL075-342-4403
FAX075-342-4345

新潟営業所
TEL 025-374-5510
FAX 025-374-5511

札幌アメミヤ 新規店
札幌市中央区南一条西 2丁目5南一条ビル5F
TEL011-398-9400
FAX011-398-9401

筆・墨・硯・書画用紙・色紙短冊・日本画用具
株式会社 松楳園
〒600-8075 京都市下京区柳馬場通仏光寺下ル
TEL（075）351－6380(代)
FAX（075）361－8006
http://www.shoubaien.co.jp.

鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路 上ル下本能寺前町 520
営業時間 10～18 時 定休日(日曜日)
TEL.075(231)0510 FAX.075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車 5 番出口

りゅう し どう
龍 龍村硯堂
京都 〒604－0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL. 075-252-4120 FAX. 075-252-0006
東京 〒102－0072 東京都千代田区飯田橋四丁目六の二
東洋美術印刷本社ビル一階
TEL. 03-3239-0733 FAX. 03-3239-0731

文房四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交（さんこう）
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX／075－222－0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本 社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町27
TEL／075－572－8964 FAX／075－572－8905

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の 津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL (075) 371 - 8186 (代)
FAX (075) 371 - 8189

□部員紹介□

顧問　人間環境学研究科教授　阿辻哲次先生
技術顧問　日展会友・書道家　寺本蒼玄先生

一回生
農　新井一矢
薬　荒巻拓哉
工　石川敬一
工　猪原宏太
理　上西隆太
工　牛山泰喜
工　上井晴仁
工　閤妹恒
工　角谷遊野
総人　加藤大智
農　釜阪紘平
工　藏岡凌平
文　篠原理那
光華　島津七明
工　白谷暢浩
教育　神保里帆
工　宗哲仁
理　武田桃子
法　徳川鈴奈
理　疋田研一郎
農　古川智大
法　寶官紗紀
農　松下有菜
法　山崎絢香
医　山下燎亮
総人　山脇謙
文　吉村友希

二回生
工　飯岡達也
農　稲葉由花利
工　王隽齐
法　大石龍太
工　岡本悠
農　片野裕太
工　河合翼
医　河原理恵
法　北堀雄大
法　小島健史
工　柴田尚紀
工　石博昭
法　高橋侑生
工　辰巳鴻介
法　戸高郁穂
農　中谷百花
法　中野綾香
理　東村智佳
工　藤田雄也
農　松澤祐実
文　宮下拓也
農　家倉凌
経済　山野敬子

三回生
法　浅野彰浩
工　天艸開
医　上田美幸
法　大泉陽輔
医　川上澄香
農　菊池悠里
工　小松聡子
工　柴田翔
工　鈴木貴也
法　多門千早
法　寺田実穂子
農　寺西幸
法　中田真規
文　橋詰奈央
法　檜山葵
総人　平野泰隆
工　藤井結稀
工　森美幸
文　康村博宣
工　山本大翔
農　吉田梨沙
薬　渡辺健介

四回生
農　旭亮
法　東佳央里
府立　井上莉穂
理　植島寛之
文　内村実穂
経済　太田悠子
理　大西春菜
工　大庭諒介
工　奥山優
工　小野愛美
文　小林真由美
工　佐藤綾美
農　杉本綾香
総人　鈴木新人
工　鈴木遼
農　武井友里恵
工　時藤大典
理　富崎友理子
経済　仁位元信
工繊　藤島愛子
薬　松村貴史
医　真殿知佳
農　村田真名美
医　山口萌
文　李玖如
理　脇本啓太

六回生
医　岡本清二

大学院生
修士一回生
工　池田亜由美
農　尾崎由布子
文　中川和也
法　中川真理子
工　永溝聡士
工　米田直紀

修士二回生
工　小川薫
工　木谷亮太
人環　窪田頌
農　高垣茜
農　中野周平
法　西眞庸夏
工　弘中浩太
医　福田宗弘
理　舛井千草
工　水谷慈
工　横山成基

博士三回生
理　植野正嗣

研究生
情報　トルマチョブ・アルセーニ

研究員
園田真也



This book was
made by the LeME